

平成 24 年度採択文部科学省 スーパーグローバル大学等事業
経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援

世界で活躍するスマートでタフな 日中英トライリンガル人材の育成

平成 26 年度 事業成果報告書



杏林大学

Contents

○学長所感	1
○経済社会の発展を牽引する グローバル人材育成支援事業の概要及び5ヵ年計画	2
○平成 26 年度の事業成果報告	
・卓抜した語学力養成	4
・スマートでタフな交渉能力の養成	8
・学生の留学先となる協定校開拓・交流事業の拡大	11
・海外交流の動き	20
・学生の海外留学促進・支援	25
・学生・教職員の国際力育成	32
・大学のグローバル化、教育の質保証の推進体制確立	40
・対外広報の展開	45
○中間評価における特記事項への対応状況	46
○平成 26 年度 第三者評価委員会の開催概要	47
○平成 27 年度事業計画	49

学長所感



学長 跡見 裕

杏林大学では、教育理念として「優れた人格を持ち、人のために尽くすことのできる国際的な人材を育成すること」を掲げ、国際協力に貢献できる人材の育成に努めております。

本事業は平成 24 年度にスタートしましたが、平成 26 年度は補助期間(5年)の中間年度にあたり、本学が取り組んできた事業成果の検証と、これから取り組むべき項目の点検・確認を行いました。

まず、本学が取り組んでいるグローバル人材育成事業で掲げている「卓抜した語学力(日中英トライリンガル)」と「スマートでタフな交渉能力」について、育成すべき人材像を明確に示しました。そして、学生が身に付けるべき素養について、ルーブリックを用いて可視化する取り組みも進んでいます。ルーブリックでは、学生自身が身に付けるべき素養を明確に意識付けするとともに、4年間をとおしてどのように成長したかを可視化できるようになりました。

また、学生の留学先となる海外協定校を 49 校まで拡大するとともに、海外インターンシッププログラムの開拓、留学中の危機管理等を含めたきめ細かなサポートや、大学独自の留学奨学金制度、留学中の学納金減免制度等の経済的支援を行いました。その結果、平成 26 年度に海外留学・研修に出かけた学生数は 173 人(平成 24 年度 109 人、平成 25 年度 150 人)と、大幅増に繋げることができました。

本学では、平成 28 年度にすべての学部・大学院を三鷹市に集約する計画を進めており、現在八王子にある外国語学部、総合政策学部、保健学部、国際協力研究科、保健学研究科を、新たに開設する「井の頭キャンパス」に移転します。

移転完了後は、全学部・研究科が近くなるため、学部融合的な教育が可能になります。また、本事業により培われたグローバル人材育成の流れを全学部に波及させ、大学全体のグローバル化を推進してまいります。

経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援事業の概要及び5カ年計画

取組学部・研究科等： 外国語学部(915人)

【構想の目的・育成するグローバル人材像】

21世紀の日本社会は、これまでも増して様々な分野でのグローバル化が進行し、国際的人材の必要性がより高まっている。また世界の諸地域、特に経済発展の著しいアジアの中で日本の国際競争力の向上は喫緊の課題である。

今後、日本が進める国際協力は国際競争と表裏一体であり、海外の国々と共に成長・発展するパートナーとして対等の関係性を構築することが重要である。

国際協力・国際競争においては、日本人としてアイデンティティを維持しつつも広い視野を持った国際人としての感覚を持つこと、すなわち自らの文化と同等に異文化の尊厳を尊重する姿勢が肝要である。この対等の関係性と誠意・熱意により醸成される永続的な信頼関係は、個人と個人の信頼関係、国と国との絆の構築に寄与する。さらに共に成長・発展する対等のパートナーとしての信頼と競争的關係は、理想的な国際協力へと発展し日本が尊敬される豊かな国とする礎となることが期待される。

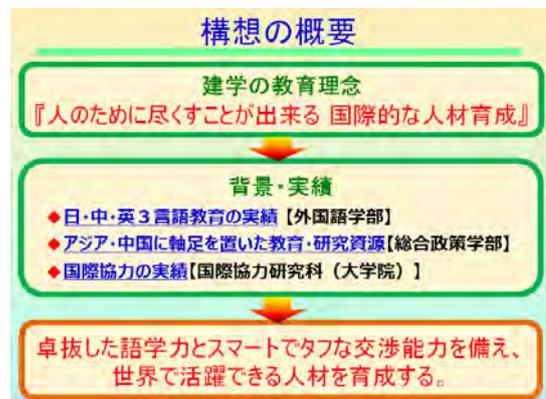
【構想の概要】

外国語学部は、共通言語としての英語に加え、中国語教育に重点をおいてきた。中国語と英語をツールとすることは、アジアでのビジネス展開や交渉の場で活躍する第一歩であり、ひいては全世界への飛躍につながる。

本事業は、「卓抜した語学力」と「スマートでタフな交渉能力」を兼ね備えたグローバル人材を養成することを目指す。外国語学部の語学教育をさらに強化するとともに、アジア・中国に軸足を置いた学際的な教育資源を持つ総合政策学部と連携し、最終的には学内外への成果の波及を図るものである。

1. 卓抜した語学力の養成

「卓抜した語学力」とは「責任ある仕事を遂行できるレベルの語学力」を意味する。独自に開発した実践的語学教育プログラム(CIC、PEP等)を少人数クラスで実施することに加え、ネイティブスピーカーと目標言語のみでコミュニケーションをする「中国語サロン」「英語サロン」の常設、中国の名門大学から来ている留学生との積極的な交流、eラーニング、BBC・CNN・中国国営テレビ等の常時放映・視聴、同時通訳システムの積極的な活用などを通して、より実践的な語学力の習得を目指す。



2. スマートでタフな交渉能力の涵養

「スマートでタフな交渉能力」とは「自他の文化と教養に精通し、文化的慣習をわきまえ、対等に交渉することで創造的な結論を導き出せる能力」を意味する。「国際関係論」「アジア政治論」等の総合政策学部開講科目の履修に加え、PBL 形式のディベートシミュレーションである「ケーススタディ演習」を通して、一般的な語学検定試験のスコアには表れにくい「問題発見力」「問題解決力」「自己表現力」を養成する。留学等の「プログラム修了プレゼンテーション」や「卒業研究報告会」を中国語あるいは英語で行い、母語話者との質疑応答能力を外部評価委員が判定することで学習成果の評価を行う。

3. 海外留学、研修の推進

「卓抜した語学力」や「スマートでタフな交渉能力」を兼ね備えたグローバル人材を育成するために、海外留学は極めて重要な位置を占める。本学では、独自の奨学金制度や授業料等減免制度による経済的支援のほか、専門の教職員による留学前・留学中・留学後のきめ細かな指導・支援を行っており、留学を通して、グローバル人材として具備すべき知識・能力を修得できるようなシステム「主体的な留学プログラム(Active Studying Abroad Program: ASAP)」により、学士課程終了まで一貫したサポート体制を整備し、学生の海外留学・研修の推進をしていく。

グローバル人材育成方法(2)

《スマートでタフな交渉能力》

総合政策学部開講科目の積極的な履修を推進

「国際関係論」「国際経営学」「アジア政治論」「アジア経済論」等



ケーススタディ演習

PBL形式のディベートシミュレーション




- ・「中国語で学ぶ」専門科目開講
- ・産学・高大院連携シンポジウムの開催
- ・国内外でのインターンシップ・ボランティア活動の積極的奨励

学習成果の確認

《卓抜した語学力》—検定試験を活用—

	中国語学科 日中通訳翻訳プログラム	英語学科 観光交流文化学科
中国語	・HSK5級以上 (中国一流大学入学レベル) ・中国語検定2級以上 ・通訳案内士(中国語)	・HSK2級以上 (日常会話レベル) ・中国語検定4級以上
英語	・TOEIC500点以上 ・TOEFL iBT52点以上 ・IELTS4.5点以上	・TOEIC800点以上 ・TOEFL iBT80点以上 ・IELTS6点以上

《スマートでタフな交渉能力》—外部委員による客観的評価—

プログラム修了プレゼンテーション

中国語あるいは英語でプレゼンテーションを行い、学習成果を評価

卒業研究報告会

中国語あるいは英語で発表し、母語話者との質疑応答能力を評価

「主体的な留学プログラム」と留学支援体制

「主体的な留学プログラム」Active Studying Abroad Program

留学を軸に、語学能力向上に加え、グローバル人材として具備すべき知識・能力を修得できるようなスキーム

【事前準備】

- ・語学力向上(CIC・PEP)
- ・教養知識の涵養
- ・留学目的の明確化

【留学】

インターンシップを含む、現地の生活体験を通して、語学力と異文化理解力の涵養

【留学後展開】

- ・プログラム修了プレゼンテーション
- ・ゼミナールでの専門的個別指導

海外留学の積極的支援(当初の海外協定校は32校、今後5年で50校まで拡大予定)

1. 交換留学では留学先の学納金免除
2. 派遣留学では本学学納金8割減免
3. 海外研修・留学奨学金制度の継続的な拡充
4. 留学先で取得した単位を卒業要件単位に認定
5. キャリアサポートセンターを中心とする留学中・帰国後の就職活動支援



平成 26 年度事業成果報告

○卓抜した語学力養成

1. 同時通訳教室の活用

平成 24 年度の同時通訳練習スタジオの最新機器・備品を整備・拡充により、同時通訳メソッドを取り入れた高度語学力養成教育が可能になった。「卓抜した語学力」の養成を目的とし、日中同時通訳の理論から実践まで、様々なシーンに幅広く活用され、同時通訳システムを利用した授業が行われている。また、海外の大学等と同時通訳における教育方法に関する教育交流にも大きな役割を占めている。



平成 26 年度では、前・後期合わせて 12 コマ／週の授業のほか、学生による自主的な学習にも利用された。第 11 回グローバルセミナー(平成 26 年 11 月 13 日実施)では、「同時通訳スタジオの活用方法」と題し、その更なる活用を学生および教職員が共に考えるとともに、語学学習における有効性を再確認した。

2. 特任教員

「卓抜した語学力」を涵養する、より実践的な語学授業を充実させるために、ネイティブスピーカーである特任教員 4 名(中国 1、アメリカ 2、カナダ 1)を引き続き雇用した。これにより、最少 5 名の少人数教育が拡充するなど、外国語学部が独自開発した中国語教材 CIC (Chinese for International Communication) 及び英語教材 PEP (Practical English Program) を使用した語学の授業運営体制が強化された。さらに日本人教員と母語話者教員とが有機的に協働することで学生の留学準備に資するより実践的な授業体制を提供している。

3. 語学サロンの運営

ネイティブスピーカーといつでも気軽に会話を楽しめるコミュニケーションスペースとして、ガーデン丘(C 棟)2階の国際交流プラザに中国語、英語サロンを常設している。各サロンには、中国語・英語の母語話者が常駐しており、学生は自由時間や空き時間に訪れ、特定の話題について留学生やネイティブスピーカーの教員と意見交換をしたり、会話を楽しんだりすることができる。また、日頃から母語話者と交流することで「国際的な対人コミュニケーションスキル」を着実に身に付けられる貴重な空間となっている。



サロン内には海外ニュース番組等が視聴できる大型テレビが設置されているほか、中国語、英語の関連図書も配架されており、国内にいながらにして海外留学に匹敵する程度に常時外国語に触れる語学教育環境が整っている。

毎月の利用者は増加しており、平成 26 年度には延べ 2,019 名が利用した。外国語学部のみならず、総合政策学部や保健学部の学生も利用しており、本事業の取り組みは他学部へも着実に波及している。また、学生の主体的な学修時間の確保ならびに学習内容の実践的な定着にも活用されている。利用学生からは、「授業で学んだことを実践できる場があって嬉しい」「生きた言葉のやりとりを実感できる」「空き時間を有効に使うって実践的な語学学習ができるのはよい」といった感想が寄せられている。

4. チューターを活用

中国語サロン運営のため、特任教員だけでなく中国の一流大学から来ている留学生をチューターとして任用した。これにより、教室で学んだ中国語を実際に使う機会を与えるとともに、同年代のチューターと交流することにより、日本と中国の習慣の違い、中国の文化ならびに思想、コミュニケーション上のふるまい等を身につけることができる。

また 12 月にはチューターを中心に中国語・英語サロン合同クリスマス会が企画され、学生・教職員 57 名が参加した。様々な活動を通して、日本人学生と留学生間の交流や学生の海外留学志向を高めることに大いに寄与している。

5. 中国語プログラム“Chinese for International Communication”(CIC)と

英語プログラム“Practical English Program”(PEP)の強化

外国語学部が独自開発した中国語と英語の語学教育プログラム(それぞれ CIC と PEP)は、本事業で雇用された特任教員が主担当となったことにより、より実践的に運営された。従来は日本人教員が担当していた外国語学部英語学科 2 年生の英語の授業(英語Ⅲ)を四分割して少人数化(1クラス最小 5 名程度)が図られたほか、1 年生の英語の授業(英語ⅠとⅡ)では最上位クラスをそれぞれ二分割し、英語母語話者教員による留学を見越した少人数授業が実現されている。いずれも、留学準備に資する実践的な授業が展開されており、高まる留学希望のニーズにも応えうる体制となっている。平成 25 年度に続き、平成 26 年度も、外国語学部全学科 1 年生の英語の授業ならびに英語学科 2 年生の英語の授業はすべて本事業で採用した英語母語話者教員が担当した。CIC と PEP は、学生のニーズと現代社会の要請に応え、従来から年度ごとに改良を加えているが、本事業採択により(新入生・在校生を問わず)海外留学希望者が大幅に増加したことから、事業構想に即した学修成果が達成できるよう、新しい教材開発も精力的に行っている。

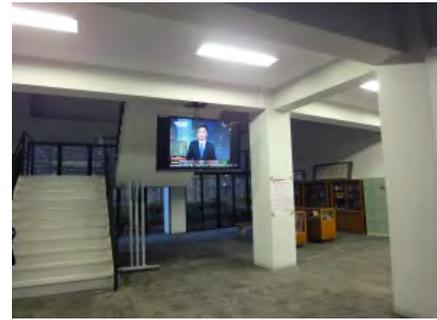
6. e-ラーニングの運用

授業以外に教室、自宅、留学先など、インターネット環境があればどこでも中国語と英語の学習ができる e-ラーニングシステムによる学習環境を引き続き提供した。学習履歴や達成度チェックなどを活用しながら自分のペースで着実に学習することができるため、学習時間の大幅な増加に加え、学習習慣の定着にも効果を発揮している。また、この e-ラーニングシステムの利用を正課授業(英語Ⅰ～Ⅳ、実用英語演習等)の評価基準の一つとして設定し、「1 日 2 時間以上の活用」を宿題として課すなど学習効果を高める方策を講じた。平成 25 年 8 月には英語 e-ラーニングシステムをクラウド型からオンプレミス型に転換し、他学部学生への利用枠拡大を図った。これにより外国語学部のみならず、他学部にも開放され、学生の学修意欲を後押ししている。

中国語については、昨年度に引き続きクラウド型の e-ラーニングを活用し、外国語学部の学生を中心にライセンスを配付した。過去に実施された中国語検定試験問題を級別にオンラインで解答し、自動採点されるシステムも備わっているため、中国語検定試験前の予行演習としても積極的活用が図られている。

7. 外国語放送の視聴

語学力強化のため、キャンパス内には、中国語(CCTV)及び英語(BBC 及び CNN)のニュース番組が受信・視聴できる設備を整えている。具体的には、ガーデン丘(C 棟)2階に設置されている中国語サロンと英語サロンに各1台ずつ、本事業の主体である外国語学部教育棟(E 棟)の入口に1台、国際交流プラザに1台の計4台が稼働しており、日常的に中国語または英語に触れる環境を提供している。



8. 語学合宿・研修の実施

更なる語学力向上を図ることを目的として、夏期休暇中に、①中国語学内研修(平成 26 年 8 月 4 日～6 日)②英語合宿(平成 26 年 8 月 1 日～3 日)③TOEIC 合宿(平成 26 年 8 月 5 日～7 日)を実施した。これら研修に参加した学生は語学検定試験において目標をクリアできることが多く、卓抜した語学力を身につける機会として十分な成果を出している。

9. 語学検定試験の実施

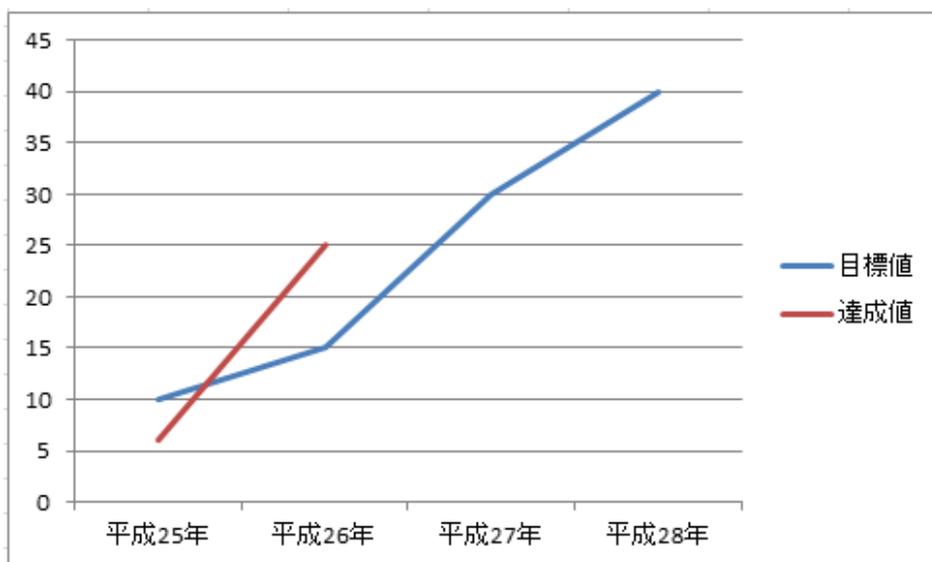
学生の語学力の向上強化および本事業の成果を可視化するため、語学検定試験(中国語検定試験、HSK、TOEIC、IELTS 等)の受験を外国語学部全学科で積極的に奨励し、学習成果の可視化ならびに継続的な学修意欲の維持を図った。それらは、語学教育・学習の成果を測定・分析するデータの一つとして活用されているほか、語学授業のクラス分け及び語学教育の発展的改良に供されている(平成 26 年度の学内実施:外国語学部全学科を対象とする中国語検定試験2回、TOEIC IP 試験2回、留学経験者および留学予定者向け TOEIC SW IP 試験1回、新入生向け TOEIC-Bridge IP 試験1回、英語インテンシブクラス向け IELTS 試験1回)。

10. 語学力養成の成果

平成 25 年度に引き続き、本学学生4名が全国学生英語プレゼンテーションコンテストに参加した。テーマに関する状況分析・問題発見・問題解決案の策定・英語による情報発信を含むこれら活動は、「卓抜した語学力」と「スマートでタフな交渉能力」の涵養に向け学生が主体的に取り組むきっかけとなった。

平成 26 年度卒業者に占める語学スタンダード達成者は 25 人で、目標数(15 人)を上回ることができた。これは、少人数クラスによる授業と e-ラーニングを用いた学習の他、中国語サロン・英語サロンの開放、語学合宿、外国語学部独自で開発している英語 PEP(Practical English Program)教材の改訂・新規開発、中国語 CIC (Chinese for International Communication) 教育システムの継続等を行ったことも一つの要因である。効果測定として語学検定試験(HSK、中国語検定、TOEIC、IELTS 等)を利用することで、更なる語学力を高める意識向上を図った。

【語学スタンダード達成者数】



本事業の構想で設定した「卓抜した語学力」としての語学カスタンダードを達成した学生の数は、平成 25 年度は目標値を下回ったが、平成 26 年度は 25 人で、目標値を上回った。

○スマートでタフな交渉能力養成

1. アクティブ・ラーニング教室の活用した PBL 型ケーススタディ演習など

「スマートでタフな交渉能力」を涵養する場として開設された最新鋭のアクティブ・ラーニング教室は、学生や教職員の評価が高く、50%を超える高い教室稼働実績を上げている。このアクティブ・ラーニング教室で総合政策学部と外国語学部との連携により開始された「ケーススタディ演習」は、「専門が異なる複数の教員による講義」と「学生・留学生中心のディベート」で構成された PBL 型の授業であり、対話力の向上のみならず、立場や出身が異なる関係で「自他の歴史や文化的慣習をわきまえ、創造的な結論を導き出すための交渉能力」の涵養に大いに資する成果を挙げている。

グローバルあるいはローカルな課題を取り上げる「基礎演習」課題発表会(1年生)においては、PBL 型の学修を通して、答えのない問題に最善解を導き出す重要性を学び、問題発見力・問題解決力・自己表現力をより一層高める指導ができた。

従来の知識伝達・注入を中心とする授業から、「学生が主体的に問題を発見し解決策を見いだしていく能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換」を図るべく、基礎演習・ケーススタディ演習・学際演習・プロジェクト演習・ゼミナール等 PBL 型の授業を積極的に拡充した。卒業研究報告会でのプレゼンテーションや、PBL 型授業の積み重ねにより、学生の問題発見力・問題解決力・自己表現力がより一層涵養されたと総括することができる。

2. 卒業研究発表会

本事業では、「生涯学び続けどんな環境でも“答えのない問題”に最善解を導くことができる能力」は、留学によって最大限に育成されるという基本認識のもと、卓抜した語学力に加えて問題発見力・問題解決力・自己表現力などの語学検定試験のスコアとして表れないコミュニケーション力の養成にも寄与する「主体的な留学プログラム Active Studying Abroad Program: ASAP」を展開している。主体的な学びに要する「事前準備→授業→事後展開」というスキームを留学に当てはめ、「留学準備→留学→留学後展開」を学士課程修了までに完了するプログラムである。

帰国直後には「プログラム修了プレゼンテーション」(平成 26 年 7 月 22 日、平成 27 年 1 月 10 日)を行い、留学成果を学習言語で発表し海外体験の総括を行った。その後卒業までに、留学で得た知識・能力のさらなる向上、発見した新たな課題の合理的な分析と解決を目指してゼミナール等での実践的な学修が進められているが、その成果を卒業直前に測る機会として「卒業研究報告会」を実施し、学士課程での学びを完結させることとしている。

平成 26 年度の卒業研究報告会は 2 月 3 日に実施され、英語学科・中国語学科・観光交流文化学科の学生が卒業論文に関する研究発表を行い、指導教員以外の様々な教員・学生等による質疑応答に対しスマートかつタフに対応できるか確認を行った。本報告会で学修成果が認定された場合、(履修指定科目の単位取得と、各学科で定められた語学力要件をクリアしていることを条件に)本学グローバル人材育成プログラムの修了証を発行している。

3. スマートでタフな交渉能力の測定方法(ルーブリック)の確立

「創造的な結論を導き出すための交渉能力」は、語学検定試験と異なり点数・スコアとして成果を評価することが難しいものであり、ルーブリック等による客観的評価により成果を測る方法を確立することが課題となっていた。

平成 25 年度には「スマートでタフな交渉能力」を測定するためのチェックシートが作られ、「プログラム修了プレゼンテーション」や「卒業研究報告会」で活用されている。また、平成 26 年度からは、杏林大学がめざすグローバル人材像を明確にし、その素養を学年ごとに可視化することにより、学生のグローバル人材としての成長プロセス、海外留学による成果なども合わせて可視化する方法が構築され、試行されている。「スマートでタフな交渉能力」を評価測定・可視化するためのルーブリックでは、学生は自己が身に付けるべき素養を明確に意識づけるとともに、4年間を通してどのように成長したかを可視化できるようにした。

ルーブリックについては、「卓抜した語学力」に加え養成する「スマートでタフな交渉能力」に関し、これを明確にするため、「知識・理解、汎用的技能(学士基礎力)」、「コミュニケーション能力」、「異文化理解とグローバル的視野」、「リーダーシップ・コンピテンシー」の項目を掲げ、学生が身に付けるべき素養として明確に示した。

ルーブリックによるグローバル素養の評価測定(自己評価に相互評価を加える)は、大学在学中の8セメスター(4年間)の中で1、3、5、7セメスターの4回実施する。1セメスターは入学時、3セメスターは海外留学前、5セメスターは留学終了(帰国)後、7セメスターは卒業前である。入学から卒業までに評価・測定を4回実施し、これをレーダーチャートやヒストグラムで比較することにより、個々の学生の成長を可視化する。

なお、ルーブリックによる評価結果を、自己評価・確認だけでなく、学生とのコミュニケーションツールとして学生同士のピアレビュー(Peer Review)も取り入れている。

杏林大学 グローバル素養測定【可視化】ルーブリック							実施							
外国語学部	学科	第	セメスター	学籍番号	氏名	担当教員								
1. 卓抜した語学力【評価の視点】							1	2	3	4	5	6	コメント	
(1)英語学科・観光文化交流学科														英語・観光
■英検(TOEICスコア、他の検定はTOEICに換算)							①	400未満	400~499	500~599	600~699	700~799	800~	
■中国語(中国語検定、HSK)							②	なし	なし	なし	中検準4級 or HSK2級=4.5		中検4級 or HSK3級	コメント記入
(2)中国語学科													中国語	
■英検(TOEICスコア、他の検定はTOEICに換算)							③	300未満	300~349	350~399	400~449	450~499	500~	
■中国語(中国語検定、HSK、通訳案内士)							④	中検準4級	中検4級 or HSK3級=2.5		中検3級 or HSK4級=4.5		漢検準4級 or 漢検3級 or 漢検2級 or 漢検1級	コメント記入
2. 知識・理解、汎用的技能(学士基礎力)【評価の視点】								低い	やや低い	普通	やや高い	高い	スコア	コメント
(1) GPA: 0~4							a	GPAの値						
(2) 文章読解力(母語)							b	1	2	3	4	5	a+(b~g)/10	コメント記入
(2) 文章作成力(母語)							c	1	2	3	4	5		
(4) 定量的スキル(数学、統計学、数的推理等)							d	1	2	3	4	5		
(5) 情報リテラシー (PC、ネットワーク等)							e	1	2	3	4	5		
(6) 学習の統合と応用力、生涯学習が続けるための知識と姿勢							f	1	2	3	4	5		
(7) 社会適応性(ルール・マナー)、ボランティア、インターンシップ							g	1	2	3	4	5		
3. コミュニケーション能力(スマートな交渉能力)【評価の視点】								低い	やや低い	普通	やや高い	高い		
(1) 相手の意見をよく聞か理解することができる							h	1	2	3	4	5	(h~m)/5	コメント記入
(2) 相手の立場、意見、考えを理解・尊重することができる							i	1	2	3	4	5		
(2) 相手の立場、意見、考えを尊重した上で、自分の意見を分かりやすく述べることができる							j	1	2	3	4	5		
(4) 場外見(明快・論理的)に議論を展開することができる							k	1	2	3	4	5		
(5) 意見・情報を発信する力							l	1	2	3	4	5		
(6) 相手に働きかける力、説得する力							m	1	2	3	4	5		
4. 異文化理解とグローバル的視野(スマートな知性)【評価の視点】								低い	やや低い	普通	やや高い	高い	スコア	コメント
(1) 日本の歴史、文化、習慣、社会情勢に関する知識と理解							n	1	2	3	4	5	(n~s)/5	コメント記入
(2) 日本の良さを認識し、それを外国人にも伝えることができる							o	1	2	3	4	5		
(2) 相手国の歴史、文化、習慣、社会情勢に関する知識と理解							p	1	2	3	4	5		
(4) 相手国と日本の違いや共通点を認識している							q	1	2	3	4	5		
(5) 国際経済、国際政治等の国際関係科目の履修と理解(筆記・演習)							r	1	2	3	4	5		
(6) 国際情勢、国際政治など時事問題に関する知識と理解							s	1	2	3	4	5		
5. リーダーシップ・コンピテンシー(タフな交渉能力)【評価の視点】								低い	やや低い	普通	やや高い	高い	スコア	コメント
(1) マーケティング(創造性、リーダーシップ、自己役割の自覚)							t	1	2	3	4	5	(t~y)/5	コメント記入
(2) 全体の意見を調整し、最適化を図る能力がある							u	1	2	3	4	5		
(2) 好奇心・問題発見力、状況把握能力と問題解決力がある							v	1	2	3	4	5		
(4) 創造的発想、企画・提案力がある							w	1	2	3	4	5		
(5) ビジョンをもち、長期的に何事にも真面目に取り組む力がある							z	1	2	3	4	5		
(6) 自身のストレスをコントロールすることができる							y	1	2	3	4	5		

○学生の留学先となる協定校開拓・交流事業の拡大

平成 26 年度時点で英語圏、中国語圏の新規海外協定校 11 校が増え、14 か国・地域の 49 大学・機関と学術交流協定を締結することができた。今年度はアメリカ、オーストラリアなど英語圏での新たな協定校を開拓し、学生の留学先としての幅を広げることができた。

平成 26 年度は 7 組の教職員を海外に派遣し、協議を行った大学は、既に協定を締結した大学も含め 37 校にのぼった。これらの大学とは学生交流(留学)を中心としたプログラム、教職員の交流などについて意見交換を行い、お互いの協力体制について確認した。教職員が実際にキャンパスを訪問し、大学の概要、カリキュラム、学生の質、現地サポート体制、また大学周辺の環境・治安などについて直接に確認したことで、学生の送り出しの重要な情報・判断材料が得られた。

■新たな留学先の確保・拡大

協定校が 49 校にまで増えたことで、本事業の目的である「日中英トライリンガル人材育成」のための中国語圏及び英語圏の留学先が確保できた。新規協定校のいくつかには既に学生の派遣を開始しており、今後さらに学生の新たな留学先として、留学中の教育内容、居住環境、費用等の詳細な情報・条件を調査・調整を行い、有為な海外留学プログラムを構築し、学生を派遣していく。





学術交流協定大学一覧（平成 27 年 3 月現在）

No.	(国/地域)協定大学名
1	(香港)香港中文大学
2	(オーストラリア)ウーロンゴン大学 英語センター
3	(イギリス)イーストアングリア大学
4	(韓国)乙支大学校
5	(中国)河北大学
6	(台湾)国立政治大学
7	(ベトナム)ハノイ国立大学 社会科学人文科学大学
8	(韓国)高麗大学校
9	(台湾)南台科技大学
10	(タイ)マヒドン大学
11	(韓国)建陽大学校
12	(韓国)韓瑞大学校
13	(中国)天津外国語大学
14	(台湾)大仁科技大学
15	(ケニア)ケニア中央医学研究所
16	(中国)ハルビン医科大学
17	(シンガポール)シャータックシンガポール 国際ツーリズムカレッジ
18	(中国)北京第二外国語学院
19	(中国)杭州師範大学
20	(中国)浙江工業大学
21	(中国)北京外国語大学
22	(中国)北京語言大学
23	(中国)大連外国語大学
24	(中国)上海外国語大学
25	(中国)広東外語外貿大学

No.	(国/地域)協定大学名
26	(ニュージーランド) クライストチャーチ・ポリテクニク工科大学
27	(韓国)国立公州大学校
28	(中国)東華大学
29	(フランス)オーベルニュ大学 (クレルモン第1大学)
30	(オーストラリア)ディーキン大学
31	(中国)大連大学
32	(中国)北京大学外国語学院
33	(タイ)チェンマイラチャバット大学
34	(イギリス)チチェスターカレッジ
35	(台湾)国立高雄餐旅大学
36	(イギリス)レスター大学
37	(アイルランド)リムリック大学
38	(オーストラリア)アデレード大学
39	(アメリカ)ノーザンアリゾナ大学 *H26 年度新規
40	(オーストラリア)サンシャインコースト大学 *H26 年度新規
41	(アメリカ)ルイスアンドクラークカレッジ *H26 年度新規
42	(イギリス)ブライトン大学 *H26 年度新規
43	(アメリカ)ポートランド州立大学 *H26 年度新規
44	(アメリカ)オレゴン州立大学 *H26 年度新規
45	(オーストラリア)南オーストラリア大学 *H26 年度新規
46	(台湾)台湾環球科技大学 *H26 年度新規
47	(タイ)コンケン大学 *H26 年度新規
48	(中国)華東師範大学 *H26 年度新規
49	(中国)天津理工大学 *H26 年度新規

新規協定校開拓・交流事業の拡大

平成 26 年 5 月 26 日～平成 26 年 5 月 31 日

訪問先	NAFSA Annual Conference (San Diego)
訪問者	外国語学部 岩本和良 准教授 国際交流課 川尻明香 課員

目 的

NAFSA 年次大会は年に1度開催される、国際教育や留学に関連する会議や研修などを行う、世界各国から教育機関が集まる会である。グローバル人材育成推進事業の一環として、本学の協定校拡充(欧米圏)および現協定校との情報交換を目的とし、NAFSA に参加している各国の大学関係者とミーティングを行う。

行 程

5月26日(月)

NAFSA 年次総会レジストレーション手続き/会場視察/World Exhibition や Workshop 会場の視察

5月27日(火)

Hong Kong's University Grants Committee Breakfast Meeting、JAFSA Lunch Reception、US Higher Education Partnership Fair 参加/協定校充実について意見交換/各大学と打合せ・意見交換 (Pohang University of Science and Technology、University of California、Davis、South Seattle Community College、The University of Texas at Tyler、Slippery Rock University、Oregon State University、Lewis & Clark College)

5月28日(水)

株式会社ディスコ関係者と打合せ/協定校充について意見交換/各大学と打合せ・意見交換 (香港中文大学、高麗大学、National University of Singapore、北京語言大学、Taipei Medical University、Chulalongkorn University、Texas A&M Commerce)/英検協会 Networking Reception 参加

5月29日(木)

協定校充実について意見交換/各国大学と打合せ・意見交換 (Northern Arizona University、Bangor University、St. George's University、Swinburne University of Technology、University of Auckland、English Language Academy、University of Malaya)

総 括

今回、杏林大学として2回目の NAFSA 参加を行った。開催場所がサンディエゴという事もあり、NAFSA には約 9,000 人が参加し、全世界から多くの大学関係者が参加する会となった。日本からは JAFSA が取りまとめる「Study in Japan」エリアに 44 大学がブース出展を行い、これは昨年の 25 大学から倍近い参加数であった。

昨年の NAFSA での打合せを期に協定に発展した大学関係者とも再会し、協定締結後の展望について協議した。新たな協定に向けて前向きな話し合いが出来た大学もあり、大変実りの多い出張となった。NAFSA への参加を通じて各協定校関係者と直接打合せができることは大変良い機会である。今後、本学が留学生受入れに向けたプログラムや体制が整った際は、全世界の大学関係者が集まる NAFSA はプロモーションに大変良い場である。

今回の打合せでは、本学のグローバル人材育成推進事業への取り組み、キャンパス移転、外国語学部2年次全学生の1学期留学という将来的なアカデミックプランについて協議できた。その結果、本学学生の留学条件となる英語力では、語学学習からの開始となる可能性が高い事が分かった。海外の学生受入れに関して、日本語教育の需要が高く、NAFSA のような機会に積極的なプロモーションを行う事により、

学内の国際的環境整備にも繋げられる。また、医学部や保健学部を持つ日本の大学という点から、海外の複数の大学から積極的なアプローチがあった。今回の NAFSA で情報交換を行った大学との具体的な協議を継続し、今後は留学生受入れに向けた準備も進めていく事が重要である。



新規協定校開拓・交流事業の拡大

平成 26 年 8 月 6 日～平成 26 年 8 月 15 日

訪問先	CPIT Business Development (New Zealand, Christchurch) Victoria University of Wellington (New Zealand, Wellington) Unitec Institute of Technology (New Zealand, Auckland) University of Auckland English Language Academy (New Zealand, Auckland) Massey University (New Zealand, Auckland) Southern Cross University (Australia, Gold Coast)
訪問者	Paul Snowden 副学長 国際交流課 榊原敬治 課員

目 的

今回の訪問では、本学の協定校拡充および既に協定を実施している大学への訪問を目的としてニュージーランド3都市の5大学とオーストラリアの1大学を訪問した。

訪問先大学との関係者とは情報交換を行い、本学学生の海外留学・研修先の開拓の可能性を協議した。面談時には、スノーデン副学長から本学のアカデミックプランを説明し、相手大学での受入れキャパシティを聴取し、実現可能であるかどうかを検討した。

行 程

8月8日(金)

CPIT 訪問／キャンパス見学／学生交換および日本語教育インターンシッププログラムの継続について確認／保健・看護学生の受入れについて協議

8月9日(土)

Victoria University of Wellington 訪問／キャンパス見学／本学学生の派遣に向けての確認／学生宿舎の確認

8月11日(月)

Unitec 訪問／キャンパス見学／本学学生の派遣に向けての確認／学生宿舎の確認

University of Auckland ELA 訪問／キャンパス見学／本学学生の派遣に向けての確認／保健・看護学生の受入れについて協議／学生宿舎の確認

Massey University 訪問／キャンパス見学／本学学生の派遣に向けての確認／学生宿舎の確認

8月13日(水)

Southern Cross University 訪問／Lismore キャンパス見学／本学学生の派遣に向けての確認／学生宿舎の確認

総 括

今回訪問した6大学(うち1大学協定締結済)の全てが、受入について前向きな意向があるという返答があった。学生の交換に関しては、どの大学も実績はあるものの、交換の学生数比率が合わない問題があり否定的であった。

受入大学が心配しているのは、日本人学生の英語能力の不足である。そのため、アカデミックのコースで勉強することもできるが、その前に英語の十分なスコアを習得するために留学前半で英語を学ぶコースに履修して欲しいとの要望があった。

プログラムに参加した留学生も奨学金を受け取れる制度を用意している大学もあるが、MOU を結ばないと適応外のため、相互から MOU を交わすことを提案した。これらの初期段階の MOU には詳しい項目を記載しないので後に、学生に加え教員の受け入れや共同研究の交流を目的とした項目も加えていきたいという案も出た。

既に協定及び学術交流のある1大学(CPIT)は、本学からの派遣学生数の枠の拡大や、CPIT での受入多様化(保健・看護等)を図り、現在の実績よりもさらに交流を発展させていくとの意向であった。

新規に訪問した5大学は、本学学生 10～20 名規模の受入に対して前向きな姿勢を持ち、用意できるプログラムの内容や具体的なコースを提示した。そして本学のカリキュラムを考慮した時期に受け入れ可能である旨を相互確認した。



新規協定校開拓・交流事業の拡大 平成 26 年 10 月 19 日～平成 26 年 10 月 22 日

訪問先	国立政治大学 環球科技大学
訪問者	国際交流課 岩本久美子 課長補佐 国際交流課 川尻明香 課員

目 的

本学への留学生促進を目的とし、協定校である台湾の国立政治大学で毎年行われている留学フェアに参加することとなった。また、国立政治大学関係者と今後の学術交流について確認を行い、留学フェアに参加している海外の大学関係者と情報交換を行った。留学フェア終了後は新規協定校開拓のため、環球科技大学を訪問し将来的な交換留学・派遣留学について意見交換を行った。

させたいという思いが伝わってきた。本学の外国語学部3学科の授業内容および現在取り組んでいるトライリンガル人材育成事業と、環球科技大学の中国語コースはもとより中国語または英語で学ぶことができる専門科目とが合致していることから、学術協定および学生交換協定のパートナーとして相応しい大学であると考える。

今回の2大学訪問により、現在の協定校への継続的な学生の派遣に向けた協議および新規協定校候補との情報交換を行うことができ、本学が目指すグローバル人材育成に向けて更なる海外留学生の促進に繋がる実りの多い出張となった。

行 程

10 月 20 日(月)

国立政治大学にて Study Abroad Fair ブース設営/
国立政治大学および出展大学関係者との歓迎セレモニー/
Study Abroad Fair 参加/
キャンパスツアー/
ディナーミーティング

10 月 21 日(火)

環球科技大学訪問/
キャンパスツアー/
両大学の国際交流についての検討/
交換留学について/
短期研修の相互派遣について



総 括

国立政治大学で行われた留学フェアに始めて参加し、日本への留学希望者が多くいることを実感した。また、多くの台湾の学生は中国語の他に英語も話せるバイリンガルであり、更に日本語または日本にて英語による専門科目を学びたいという日本語未履修の留学希望者が多い事も特徴的であると感じた。現在行っている交換留学以外にも、受入れに関しては1学期間や短期の日本語研修などのプログラムも需要があることが分かった。



環球科技大学には、本学との学生交流を主とした国際交流について大変好感触を示してもらえた。また、環球科技大学の創設者が日本に留学をしていた経験があることから、日本の大学との学生交換をぜひ実現

新規協定校開拓・交流事業の拡大 平成 26 年 11 月 11 日 ～平成 26 年 11 月 13 日

訪問先	第 10 回 QS-APPLE
訪問者	外国語学部 坂本ロビン 学部長 外国語学部 古本泰之 准教授

目 的

本学の協定校拡充及び海外大学の動向調査を目的とし、世界各国の大学関係者と直接会うことのできる機会である QS-APPLE へ参加した。

行 程

11 月 11 日(火)

Parallel Session に参加、グローバル社会における大学教育のあり方について等、各大学の事例を基に学ぶ。各大学出展ブースを訪問、サマープログラムや留学生受入れについて意見交換を行う。

11 月 12 日(水)

Parallel Session に参加、マルチカルチャーの教室における教養教育、文化的差異をテーマとした授業のあり方や、修士課程におけるカリキュラムの国際化、ランキング指標の達成に向けた枠組み、英語を用いた授業のあり方等について学ぶ。

Plenary Session や QS Debate に出席、企業が求める人材育成と大学のカリキュラムとの調整の必要性や、オーストラリアのニューコロンボプランにおける大学の国際化戦略など、現在の世界の大学教育における課題および今後の方向性について知見を得る。各大学出展ブースを視察、サマープログラムや留学生受け入れについて意見交換を行う。

香港理工大學・梨花女子大学・L.N.Gumilyov Eurasian National University・University Putra Malaysia などの大学と交流、各大学のサマープログラム(1か月以内の海外体験)や留学生受け入れプログラムの現状について情報交換を行う。

近畿大学・大阪大学・東京工業大学・慶應義塾大学・QS-APPLE 日本代理業・立命館大学などの関係者と交流、各大学の国際化の状況、ランキングシステムへの参入に関する状況共有および議論を行う。

台湾国立政治大学に派遣されている本学学生と会合を持ち、留学の状況を確認した。

11 月 13 日(木)

Parallel Session に参加し、グローバル社会における大学教育のあり方、国際インターンシップやランキング制度の今後などの視点から学ぶ。Closing Plenary に出席し、世界の大学におけるポジショニング戦略や研究力と教育力双方の強化、ランキングによる評価の今後などについて知見を得た。

総 括

今回、QS-APPLE という国際的な「大学格付け組織」が行うカンファレンスに出席し、各国のリーディング大学がどのような方向性で大学の国際化や教育・研究環境の向上を図っているかを、マネジメント・教育現場双方の視点から知ることができた。

各大学とも留学生の確保、さらには優秀な教員を確保するための国際的なリクルーティングに積極的に動いており、そのための「広報戦略」に注力している点が目立った。また、国際社会で活躍する人材を輩出するためのカリキュラム改革を不断に行うとともに、「大学間」「大学－企業間」での連携を促進している点は、今後の本学を考える上で大きな参考となった。

各大学とも魅力的な短期・中長期の留学プログラムを有しており、グローバル人材育成事業の採択を契機として、本学学生が積極的に参加することは有意義といえる。留学生受け入れについても、プログラムを前向きに見直す必要があると考える。

一方で、QS-APPLE に積極的に参加している大学と日本の大学とでは、置かれている社会的環境など構造が異なっている部分が多く、特にランキングを意識した国際化戦略の取り組み全てをそのまま導入することはすぐには困難であり、すでに普及している個別の取り組みを順次「日本化」させて取り入れていくことが妥当と考えた。

新規協定校開拓・交流事業の拡大 平成 26 年 11 月 29 日～平成 26 年 12 月 5 日

訪問先	Victoria University of Wellington
訪問者	外国語学部 小林輝美 助教

目 的

本学学生の留学先候補となる Victoria University of Wellington (以下 VUW) の訪問大学における教育および学生支援サービスに係る品質確認を実施した。

ため、世界各国から留学生が来ており、日本人同士のクラスより異文化交流しやすいなど、利点も多いと思われる。

行 程

12 月 1 日 (月)

Student Service Seminar/VUW における Student Service 体制やサポート内容について

English Proficiency Program Seminar/VUW における英語教育のシステムおよび内容について

Home Stay Seminar/VUW におけるホームステイ先の手配や条件等について

Internship Seminar/ニュージーランドにおけるインターンシップ制度について

Powhiri というニュージーランドの先住民族であるマオリの出会いの伝統的な儀式を体験する

施設としては、キャンパス内に寮があり、大変便利である。英語を学習するための教室も広く、設備も整っている。教室以外にも図書館はもちろん、学習できる机や椅子を備えたスペースが充実している。学食やレストラン、日本食のような食べ物を購入できるお店もあり、食事も問題ないと思われる。

ホームステイの場合も通学 35 分以内の家を紹介してもらえるため、通学に便利である。ホストファミリーに対してケアしており、見学したホームステイ先はバス停から近い、家が広いなど居住環境もよく、ホストファミリーも好意的であり、生活しやすそうであった。

12 月 2 日 (火)

English Proficiency Program の Class 4、Upper Intermediate クラスの見学/ウェリントン市内見学

ウェリントン市はニュージーランドの首都であるが、コンパクトにまとまっており、必要なものは都市部だけですべて間に合う。地理的な特徴としては海と丘、山があり、キャンパス周辺は坂が多い。自然に恵まれており、車で 1 時間も離れると別の地域のようなのである。郊外ではニュージーランドで盛んなトレッキングをする場所やワイナリーがあるなど、余暇を過ごすのに適した場所もある。道路沿いに街灯がないことが気になったものの、治安が良く安全らしいため、問題とはならないだろう。総じて、英語を学習するためのプログラム、環境ともに整っており、留学するのにふさわしい土地、学校であった。

12 月 3 日 (水)

ウェリントン郊外見学ツアー

12 月 4 日 (木)

Final Seminar、Services Seminar/VUW における留学生サポートを行う職員・学生サポート体制について

Internship Seminar/ETC が提供しているインターンシップ制度について/Wellington City/ウェリントンについて

総 括

本出張では VUW Japanese Partner Institutions Familiarization Visit に参加し、大学や施設、現地の生活環境を視察した。まず、提供している英語学習プログラムである EPP はアカデミックな英語を学習するのにふさわしく、一般的な語学学校とは異なり、大学生には適していると思われる。また、VUW は大きな大学の



新規協定校開拓・交流事業の拡大 平成 27 年 2 月 14 日～平成 27 年 2 月 18 日

訪問先	Southern Cross University
訪問者	外国語学部 岩本和良 准教授

目 的

海外における新たな留学・研修先の開拓及び協定校の拡大を目指し、新協定校候補であるオーストラリアのサザンクロス大学シドニーキャンパスにて学生及び教職員の交流に関する情報収集を行う。

行 程

2 月 16 日(月)

サザンクロス大学・ホテルスクール訪問／キャンパスツアー／Director of Sales and Marketing の Carlos Reis 氏と打合せ

ビジネス学部訪問および校舎見学／キャンパス・ディレクターの Nathan Asher 氏と打合せ

Sydney College of English 訪問／新木氏が運営するサザンクロス大学の指定語学学校でのプログラムおよび教育内容について伺う。

総 括

サザンクロス大学・ホテルスクールは他大学の学部 비해、外国人留学生の数が 2～3 割ととても低く、他大学では 7 割以上であり、留学生の 1 年間の授業料は 200 万円以上である。6 ヶ月のホテルでのインターンシップ（有料）を必須としており、シドニー市内のホテルでインターンシップを行う学生が多いが、オーストラリア国内外のホテルも認めている。最低賃金時給 18 ドルの給与が支払われるインターンシップとなる。学生は普段の授業からスーツを着用し、ホテルで働くという意識を保ちながら授業をうけている。

現在、半年または 1 年という短期の留学生を受入れていないが、杏林大学とのダブル・ディグリーは検討していきたいとのことであった。両大学にとって、非常に魅力的な広報材料になるであろう。ダブル・ディグリー制が現実となった場合、学生は原則として IELTS6.0 を取得している必要

があるが、5.0 または 5.5 であれば、10 週間あるいは 20 週間の英語のクラスを受講した後、正式な学生として受入れることも可能とのことであった。

サザンクロス大学ビジネス学部があるシドニーキャンパスは移動してきた 2 年生と 1 年生だけが学んでいるということで、まだ全ての教室を使用していない状況である。大学院レベルでは MBA、学部レベルでは Business を中心に学べる校舎で、これから発展させてようとしている。教員は全て非常勤講師であるが、有名な講師が多いとのことである。The Hotel School と同様、短期での留学生受入れは行っていないが、ダブル・ディグリー制度を確立すれば、良きパートナーになれるだろうとのことであった。特に、本学の英語ビジネスコミュニケーションコースの学生であれば可能性は高いであろう。

The Hotel School と Sydney Campus とは、直ぐに交流を始められる状況にはない。しかし、先方からダブル・ディグリーの話があったことは、本学にとって大きなチャンスではないかと考える。先方も、中国の大学とはこの様な協定を結んでいるが、日本の大学とはまだであるとのことであった。調整すべきことは多いだろうが、検討すべきと考える。

新規協定校開拓・交流事業の拡大

平成 27 年 2 月 10 日～平成 27 年 2 月 14 日

訪問先	Nilai University Berjaya University College of Hospitality Monash University Malaysia
訪問者	Paul Snowden 副学長 外国語学部 赤嶺恵理 講師 国際交流課 川尻明香 課員

目 的

アジアにおける協定校拡充および既にプログラムを実施しているベルジャヤ・ホスピタリティー大学への訪問を目的としてマレーシアの3大学を訪問し、関係者と情報交換を行う。

行 程

2月11日(水)

ニライ大学訪問／今後の両大学の国際交流についての検討／本学の学生受入れについて／現地留学環境について聞き取り(宿舎・学習環境等)／キャンパスツアー／ランチミーティング

2月12日(木)

ベルジャヤ・ホスピタリティー大学訪問／今後の両大学の国際交流についての検討／現地留学環境についての聞き取り(宿舎・学習環境等)／大学施設見学／ランチミーティング

2月13日(金)

今後の両大学の国際交流についての検討／現地留学環境についての聞き取り(宿舎・学習環境等)／キャンパスツアー

総 括

今回のマレーシア出張を通じて強く感じたことは、まずマレーシアという国が既に発展途上国ではないという点である。特にクアラルンプール市内近隣は活気に溢れ、モノレールや電車等の公共交通手段の利便性も高く、世界からの注目度の高さとそれに対する成長スピードを感じた。また、市外や大学の外でも英語でのコミュニケーションが可能であり、生活言語として英語が定着している多国籍・多民族のグローバルな国であることが分かった。この点では、英語圏の留学先としてマレーシアという国が他の英語圏と比べても決して劣っていないという発見と同時に、同じアジアの中にいる日本人として若干の危機感を感じることもあった。

また、普段日本での生活では経験することのできないさまざまな宗教や人種を尊重するマレーシア文化の中で提供されている教育の違いを感じることは、グローバル人材育成には非常に重要な役割を持つと思われる。アジアの中の日本や、世界におけるアジア等、日本と世界に目を向けるきっかけ作りとして東南アジアへの留学は欧米やオセアニアへの留学よりも身近に感じる安心感は留学を躊躇する学生にも適していると言える。マレーシア留学のもう1つの魅力が留学費用である。マレーシアでは英語による高い教育水準の授業を欧米やオセアニアの約1/3の費用で受講することが可能であり、更に生活費も抑えられることは留学を希望する学生やその保護者の経済的な負担を軽減できる。また、日本からクアラルンプールへは直行便も数多く出ており、時差が1時間であることは大学側としての危機管理面においても、学生とその保護者にとってもメリットが多い。今回訪問した全ての大学が安全性に重要度をおいており、キャンパス内や学生寮の警備体制等は万全と言える。街中に関しては、夜遅くに一人で出歩かないなどの常識的な危機管理を心掛ければ他の国同様、特別危険なことは無いと感じた。

訪問した3大学は異なる環境と教育内容を提供しており、それぞれに合った留学プログラムや対象学生が考えられる。どの大学も本学からの学生受入れに大変前向きであり、まずは外国語学部の学生派遣に向けて今後各大学とのやり取りを実施したいと思う。新規協定や実施しているプログラムの継続的な学生派遣にむけて実際に大学を訪問し、担当者と情報交換を行うことができたことは、更なる海外留学生の促進に繋がる実りの多い出張となった。

○海外交流の動き

4月

台湾の長榮大学健康科学学部の先生と修士課程の学生が杏林大学を訪問

平成 26 年 4 月 1 日(火)、台湾の台南市にある長榮大学健康科学学部医務管理学科の張晴翔助理教授とその修士課程の学生、合計 17 人が八王子キャンパスを訪問した。今回の訪問は、高齢化社会への対応に関する意見交換と高齢者施設を見学することが主な目的であった。

歓迎の挨拶と自己紹介に続き、総合政策学部の岡村裕准教授が日本の介護保険制度の概要について説明を行い、その後、保健学部の片桐朝美講師が介護保険制度の課題について解説した。台湾でも2年後に介護保険制度が導入されるということで、みなさんとても熱心に聞いていて、活発な質疑応答が行われた。

昼食後、八王子キャンパスの近くにある介護老人福祉施設ファミリーマイホームを訪問し、施設見学を行った。とりわけ施設にある様々な設備・機器の使い方や、施設の医療体制に関する質問が集中していた。ここでも高齢者介護問題への関心の高さがうかがえた。



5月

オックスフォードの英語学校教員による特別講義を実施

外国語学部は長期休暇中に3週間のオックスフォード研修を23年間に渡り実施しており、一昨年から英語学科インテンシブクラス対象の3ヶ月留学プログラムも開始している。

その受け入れ機関である、College of International Education, Oxford (CIE) から平成 26 年 5 月 13 日(火)に教員が来校し、インテンシブクラスの学生のためにアクティブ・ラーニング教室でオックスフォードの歴史やオックスフォードに係る人々についてのレクチャーが行われた。

その後、イギリスに留学を希望する学生たちは、イギリスのチャリティーの歴史やオックスフォード大学出身のコメディアンなどリサーチしたことについて英語でのプレゼンテーションを行い、CIEの先生や本学特任講師のネイティブ教員の先生方との質疑応答を行った。



Leicester 大学の Dr. Michael Green がスノードン副学長を訪問

1月に協定を締結したイギリス Leicester(レスター)大学の Dr. Michael Green が平成 26 年 5 月 13 日(火)、ポール・スノードン副学長を訪問した。学術交流協定のもと、Leicester 大学と今後実施する留学や研修等の交流について、有意義な話し合いが行われた。



康寧大学(台湾)の副学長一行が本学を訪問

平成 26 年 5 月 14 日(水)、台湾南部にある康寧大学から蔡智恆副学長ほか3名が学生交流を中心とした学術交流協定締結を目的に、坂本ロビン外国語学部長と塚本慶一国際交流センター長を訪問した。康寧大学には応用外国語学科、レジャー管理学科、健康介護管理学科等があり、本学の外国語学部にとどまらず他学部においても広く交流の可能性がある。また、英語のみの授業が多く開講されており、本学が目指す「日・中・英トライリンガル」人材の育成にも期待する。



Chichester College の Mr. Mark Bloodworth が訪問

平成 26 年 5 月 21 日(水)、協定校である Chichester College から Mr. Mark Bloodworth が訪問した。Chichester College へは、平成 21 年から学生を派遣しており、昨年度は 23 名の学生が留学を行った。今後の更なる交流について、ポール・スノードン副学長を中心に和やかな雰囲気での話し合いがもたれた。



6 月

北京外国語大学の邵建国教授が松田理事長と跡見学長を訪問

平成 26 年 6 月 5 日(木)、北京外国語大学の日本語学科責任者の邵建国教授が松田博青理事長と跡見裕学長を訪問した。本学は 6 月 1 日から 7 日まで経済社会を牽引するグローバル人材育成支援の一環として、本学学生の中国理解促進を目的に邵教授を招聘した。邵教授は、連日学部生や大学院生に有益な講義をし、また、中国語関連の同時通訳教育の現場を見学するなど、濃密なスケジュールをこなした。



理事長と学長への訪問の場では、塚本慶一国際交流センター長同席のもと、双方の教育現場の実態についての率直な意見交換が行われた。昨年、北京外国語大学が MTI(通訳翻訳大学院)を開設した折に、松田理事長が招かれて開講式で祝辞を述べた経緯がある。



当該大学院では、今年度、7名の定員に対し、中国全土から 70 名の応募があったとのことで、杏林大学との学術協定関係が極めてよい結果をもたらしていることについての謝辞が述べられた。

研修の最終日には、関連教員との間で今後の交流についての意見交換も予定されており、学生・教員・大学指導部と、各レベルを網羅した層の厚い交流が従来にも増して進められていることは極めて意義深いものである。

タイのコンケン大学国際学部の学部長らが本学を訪問

平成 26 年 6 月 10 日(火)、タイのコンケン大学国際学部(Khon Kaen University International College、以下 KKIUC)の La-orsir Sanoamuang 学部長と Wiroj Taweepwordej 教務部長が、ポール・スノードン副学長と大川昌利総合政策学部長を訪問した。



La-orsir 学部長は、パワーポイントやビデオ映像などを交え、コンケン大学や KKIUC について説明を行った。コンケン大学は 1964 年にタイの東北部に設立された国立大学であり、現在、27 学部にて約 4 万人の学生が在籍し

ている。KKUIC は 2007 年に設立され、現在、国際関係、グローバルビジネス等、5つのプログラムがあり、講義は全て英語で行われ、教員の約半数は外国人である。在学生の約1割が 13 ヶ国からの留学生であり、今後この割合を高くしたいとのことであった。また、KKUIC は学術英語の集中プログラムも提供している。

和やかな雰囲気の中、双方の大学に関する情報交換が行われた後、コンケン大学と杏林大学との間で、学生や教員の学術交流に関する協定を結ぶための協議を行っていくことを確認し、会談は終了した。

7 月

マレーシアのニライ大学運営法人が本学を訪問

平成 26 年 7 月 28 日(月)、マレーシアの看護・医療系学科をもつニライ大学を傘下に置く法人、Nilai Resources Group Sdn Bhd のグループマネージャングディレクター、顔永煌氏が三鷹キャンパスを訪問した。

Nilai Resources Group Sdn Bhd は、ニライ大学と本学保健学部看護学科および看護専門学校との交流や介護施設に関心を寄せており、今回の見学と至った。

一行はポール・スノードン副学長から本学の概要、保健学部等の説明を受けた後、看護専門学校の雨宮加代子副校長の案内で、看護医学教育研究棟 1F の看護実習施設で実技を行う学生の様子や各設備の見学を行った。顔氏は「医療従事者育成のため、素晴らしい施設を持つ杏林大学と今後ぜひ交流させていただきたい」と感想を述べた。

この後、株式会社 KRL が運営する住宅型有料老人ホーム「アプリコ武蔵小金井」を訪問した。玄関を入った正面の壁には“ようこそ いらっしゃいませ”とマレーシア語で書かれたスタッフ手作りの文字板が掲示されており、一行は母国の文字と両国の国旗を目にして顔をほころばせていた。

村田晋一社長から KRL の事業内容、介護施設を運営するにいたった経緯及び施設の状況について説明があった後、ケアマネジャーの橘成子さんの案内で3階建て施設内を見学し、特に介護が必要な方も安心して入浴できる機械浴室、健康体操や介護予防を中心としたデイサービスのプログラムに興味を持った様子であった。

マレーシアでは高齢化率はまだ低いものの高齢者ケアに関する取組みが今後の課題になっているということで、顔氏は KRL と杏林大学病院との連携について関心を示すとともに、「アプリコ武蔵小金井を見学して大変参考になりました」と述べた。



9 月

外国語学部生が「日中友好大学生訪中団」に参加

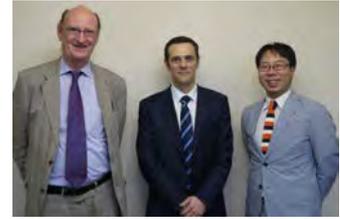
中日友好協会が日中の若者の相互理解の促進を目的に、平成 26 年 9 月 1 日(月)～8 日(月)の日程で日本の大学生 100 名を中国への招待を行った。本学学生もこれに参加し、外国語学部の中国語学科生 11 名が他大学学生とともに、中国各地で交流を深めた。

一行は、北京、西安など中国各地の大学生と様々な意見交換や歓談を行った。また、万里の長城や兵馬俑博物館等の歴史的名所や西安の開発区を見学し、自らの目で中国の現況を確かめるなど、この留学を通じて学生たちは見聞を広め、たいへん刺激を受けた様子であった。

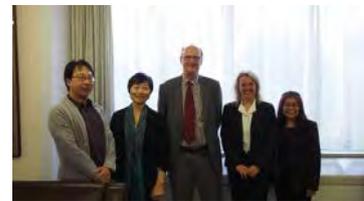


10 月
アデレード大学の Mr. Simon Futo が訪問

平成 26 年 10 月 10 日(金)杏林大学三鷹キャンパスにて、オーストラリアのアデレード大学から Mr. Simon Futo、本学からはポール・スノードン副学長と外国語学部倉林秀男准教授が出席し協議を行った。本学とアデレード大学は平成 26 年 3 月に学術協定を締結した。今回の協議はその協定をもとに次年度から実行可能なプランを策定するものであり、本学学生、教職員の派遣および受け入れについて具体的な議論がなされた。そして、次年度からアデレード大学への本学の学生の派遣をすることで合意がなされたため、今後本学学生に向けて派遣プログラムの紹介をすることとなった。


ニューカッスル大学の AnChi 氏が訪問

平成 26 年 10 月 16 日(木)にオーストラリアのニューカッスル大学から AnChi 氏、Hope 氏が本学八王子キャンパスを訪問した。ニューカッスル大学には、平成 25 年度から外国語部部の語学研修に学生を派遣している。今後は、学生の交換留学や大学間の交流を含めた協定締結ができるよう、ポール・スノードン副学長、坂本ロビン外国語学部長、倉林秀男准教授が同席の元、話し合いが行われた。



その後は、来年度の海外研修希望者に向けた説明会を行い、ニューカッスル大学の魅力を学生に伝えた。

12 月
「企業が求めるグローバル人材像」について何う懇談会を開催

平成 26 年 12 月 1 日(月)、初めての試みとして「企業が求めるグローバル人材像」について何う懇談会を新宿の京王プラザホテルにおいて開催した。

この懇談会は、海外への事業展開を行っているグローバル企業5社から、求めるグローバル人材像、グローバル人材を育成するための社内教育等について話し、本学での教育事業に反映させることを目的に開催された。

はじめに、跡見学長より開催の趣旨説明があり、続いて各社の人事担当者から、自社の取り組みについて夫々説明があった。グローバル人材に求められるものとして全ての企業に共通していることは、語学力が高いだけでなく、それに加えてコミュニケーション能力、リーダーシップ、交渉能力等が不可欠としている点である。また、多くの企業では、事業の世界展開にもとづくグローバル人材を育成するため、現地法人での実務研修等を含む様々な社員研修プログラムを実施していることがわかった。

懇談会後半の意見交換は大変参考となるもので、本学が試行しているグローバルルーブリックにも反映させることとしている。


懇談会に参加した企業

- ①竹中工務店(ゼネコン)
- ②三機工業(設備工事)
- ③エイチ・アイ・エス(旅行業)
- ④エノテカ(ワイン輸入・販売)
- ⑤タチエス(自動車シートメーカー)

オックスフォード留学・研修実施校 CIE からの来訪および事前学習会の実施

平成 26 年 12 月 4 日 (木) に、20 年以上にわたるオックスフォード研修と平成 24 年度から開始されたインテンシブプログラム留学でお世話になっている CIE Oxford 副校長の Luke Murgatroyd 氏が来訪し、外国語学部英語学科のインテンシブクラスの学生に向け1時間目と2時間目の2コマ英語の講義を行った。オックスフォードの歴史や建築物などについて、分かりやすい英語でレクチャーをしていただき、大変興味深い授業となった。その後、英語サロンにて、今春に行うオックスフォード研修の参加予定学生との顔合わせを行い、和やかな雰囲気の中、現地での授業や生活の話に熱心に耳を傾けていた。



クライストチャーチ・ポリテクニク工科大学の Mr. Mark Hornby と Mr. Tim Hayashi が訪問

平成 26 年 12 月 9 日 (火) に、ニュージーランドのクライストチャーチ・ポリテクニク工科大学(Christchurch Polytechnic Institute of Technology:以下 CPIT)から Mark Hornby 先生と Tim Hayashi 氏が訪問した。CPIT とは、本学と平成 22 年 12 月に協定を締結し、毎年両大学から多くの学生が交換留学や研修・プログラムなどで交流を行っている。今後の更なる交流について、ポール・スノードン副学長と坂本ロビン外国語学部長を中心に和やかな雰囲気です話し合いがもたれた。その後、英語サロンの様子とアクティブ・ラーニング教室の見学をした。



○学生の海外留学促進・支援

在学生の海外留学の活性化を目指し、留学プログラムの一層の充実化を図ると共に、学生の動機づけの促進や、留学中のサポート、帰国後の報告会などを通して留学支援体制の強化を図った。

1. 留学・海外研修派遣実績

派遣プログラムの多様化を図り、今年度は新たな学生の研修先として下記プログラムが加わった。

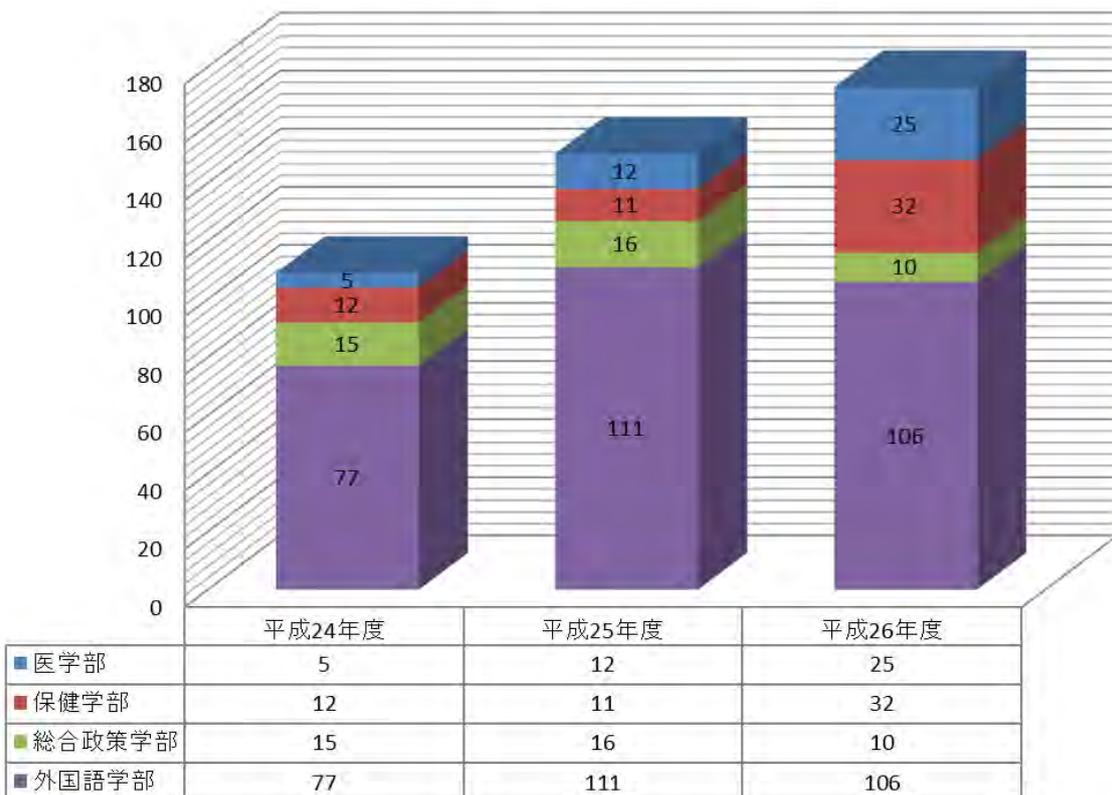
- ・ブライトン大学研修 約2週間(イギリスのブライトン)
- ・タイ研修 8日間(タイのチェンライ)

新たな留学先や提携校、さらに私費留学生も含め、3か月以上の留学参加者は、79名であった。同時に海外研修も積極的に拡充し、医学部の臨床クラークシップも含め 19 プログラム、94名が参加した。

日本語や日本文化を海外へ発信する SEND プログラムの一環として行われたクライストチャーチ・ポリテクニク工科大学日本語インターンシップ(ニュージーランド)では、現地日本語クラスのアシスタントや日本語を学ぶ学生との交流、日本の食文化のプレゼンテーションの実施等、充実した成果を上げることができた。

また、本事業が重点的に取り組んでいる外国語学部学生の海外研修・留学促進の流れは、他学部にも波及している傾向にある。特に、前年に比べ保健学部の海外研修・留学参加学生数は約3倍と増加し、医学部は前年比約2倍以上、平成 24 年度に比べると5倍と著しい増加を図れた。

海外研修・留学 参加学生数 (学部別)



平成26年度 留学実績

留学先	国・地域	実施日程	期間	人数
ビクトリア大学	カナダ	2014.4.5～2014.7.7	3ヶ月	1
		2014.4.5～2014.8.17	4ヶ月	3
香港中文大学	香港(中国)	2014.9～2015.5	8ヶ月	2
政治大学	台湾	2014.9～2015.8	12ヶ月	1
カリフォルニア大学アーバイン校	アメリカ	2014.9.29～2015.3.22	6ヶ月	10
オックスフォードインテンシブプログラム	イギリス	2014.9.18～12.22	3ヶ月	6
		2014.9.18～2015.2.23	5ヶ月	7
チチェスターカレッジ	イギリス	2014.8.31～12.22	3ヶ月	3
		2014.8.31～2015.2.16	5ヶ月	8
トロント大学	カナダ	2014.9.1～12.22	3ヶ月	1
クライストチャーチポリテクニク工科大学	ニュージーランド	2014.8～2015.7	11ヶ月	1
		2014.9.13～12.14	3ヶ月	3
		2014.9.13～2015.3.1	5ヶ月	4
クイーンズランド大学	オーストラリア	2014.8.23～12.15	3ヶ月	2
ディーキン大学	オーストラリア	2014.10～2015.2	5ヶ月	3
上海外国語大学	中国	2014.9～2015.7	11ヶ月	1
		2014.9～2015.1	5ヶ月	2
		2015.3～2016.1	11ヶ月	3
		2015.3～2015.7	5ヶ月	6
北京第二外国語学院	中国	2014.9～2015.1	5ヶ月	1
		2015.3～2016.1	11ヶ月	1
		2015.3～2015.7	5ヶ月	1
広東外語外貿大学	中国	2014.8～12	5ヶ月	2
北京語言大学	中国	2015.3～2016.1	11ヶ月	1
河北大学	中国	2015.3～2016.1	11ヶ月	1
政治大学(私費留学)	台湾	2014.9～2015.2	6ヶ月	1
Man To Man Bording School(私費留学)	フィリピン	2014.10～2015.2	4ヶ月	1
カリフォルニア大学アーバイン校(私費留学)	アメリカ	2014.10～2015.8	11ヶ月	2
北京航空航天大学(私費留学)	中国	2015.3～2016.1	11ヶ月	1
				79

平成26年度 海外研修実績

研修先	国・地域	実施日程	期間	人数
ニューカッスル大学研修	オーストラリア	2014.8.2～8.25	24日間	8
クライストチャーチポリテクニク工科大学日本語インターンシップ	ニュージーランド	2014.8.23～9.12	21日間	4
マレーシアインターンシップ	マレーシア	2014.8.16～9.14	30日間	2
バンクーバー研修(保)	カナダ	2014.9.1～9.14	14日間	18
クイーンズランド大学研修(保)	オーストラリア	2014.8.30～9.8	10日間	11
ブライトン大学研修(保)	イギリス	2014.9.20～10.5	16日間	3
オックスフォード研修	イギリス	2015.2.26～3.16	19日間	7
ロサンゼルス研修	アメリカ	2015.3.1～3.16	16日間	14
タイ研修	タイ	2015.3.5～3.12	8日間	2
College of Medicine, University of Cincinnati(医)	アメリカ	2014.4.7～5.2	26日間	3
North Shore University Health System Evanston(医)	アメリカ	2014.4.7～5.2	26日間	6
L'Universite d'Auvergne, Facultes de medecine, CHU de Clermont-Ferrand(医)	フランス	2014.4.7～5.2	26日間	3
Sydney Medical School - Northern / Medical University of Vienna(医)	オーストラリア / オーストリア	2014.4.7～5.2 / 2014.5.12～6.5	26日間 / 25日間	1
Franciscan St. Francis Health(医)	アメリカ	2014.4.7～5.2	26日間	1
North Shore University Health System Evanston(医)	アメリカ	2014.5.12～6.5	25日間	6
Stony Brook University Medical Center(医)	アメリカ	2014.5.12～6.5	25日間	2
Sydney Medical School - Northern(医)	オーストラリア	2014.5.12～6.5	25日間	2
L'Universite d'Auvergne, Facultes de medecine, CHU de Clermont-Ferrand(医)	フランス	2014.5.12～6.5	25日間	1
				94

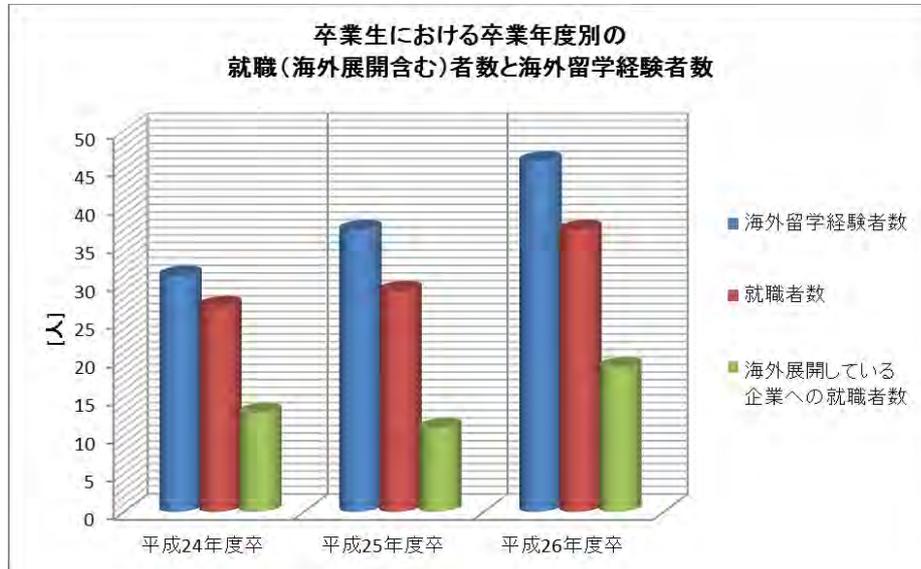
※(医)は医学部、(保)は保健学部

2. 卒業生における海外留学経験者就職実績

(※「留学」は3か月以上滞在の海外留学を示す)

平成 26 年度卒業生のうち、在学中に3か月以上の海外留学を経験した者が就職した 37 社のうち海外展開している就職先は半数以上の 19 社にのぼり、その割合は前年度 37.9% に比べ、51.3% と大きく増加した。

(表1参照)

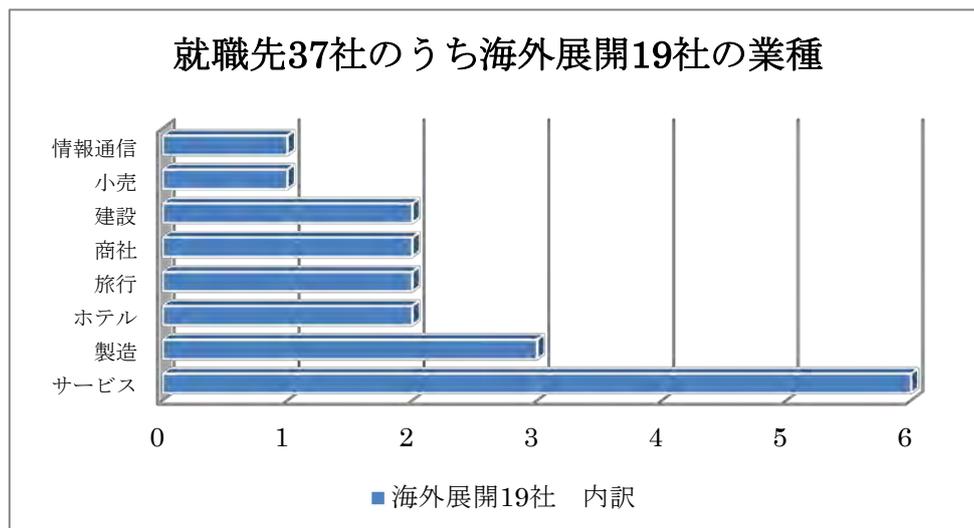


(表 1)

(※「就職者数」とは、卒業生のうち海外留学を経験した学生かつ就職した学生数を示す)

平成 26 年度卒業生における海外留学経験者での就職者数は 37 人であった。この就職先 37 社のうち、海外展開している就職先 19 社の業種は(表 2)の通りである。

また、海外展開している就職先の業種も同様に多様化し、旅行・商社・製造・建設業などの世界情勢の変動とともに注目されている分野が増加した。(表2参照)



(表2)

本事業が4年目を迎える平成 27 年度以降、本学からの海外留学者は一層増えることが見込まれる。それによって、語学力を大幅に向上させるとともに、留学先の国の生活文化に接して幅広い国際的な視野を養うなどの実力をつけ、多種多様なグローバル企業にこれまで以上に数多く就職するものと期待する。

3. 留学報告

日本語教育インターンシップ体験記(ニュージーランド)

外国語学部 英語学科 内山苑子

クライストチャーチ・ポリテクニク工科大学(CPIT)(平成26年8月～9月)

日本語教育インターンシップとして平成26年8月23日から9月12日までの3週間、ニュージーランドのクライストチャーチ・ポリテクニク工科大学(CPIT)に日本語教師のアシスタントとして研修に参加しました。CPITの日本語学科には Certificate、Degree1、2、3年生まであり、4名の日本語教師が教えていました。私たち



たちはティーチングアシスタントとして、授業中はスピーキングテストの練習の手伝い、漢字の書き方の指導、教室内を歩きながら学生の質問に答えるなどしました。Degreeの3年生のディスカッションのクラスではひとつのトピックについて学生と議論を交わしました。学生が自分の意見をしっかりとした日本語で言うことができ、とても驚きました。学生が帰った後は、職員室でテストや課題の採点や翻訳のクラスで使用する音声の録音の手伝いをしました。その他、英語で日本文化を紹介するプレゼンテーションを Certificateのクラスで行いました。日本への留学経験がない学生が多かったため、興味を持って真剣に話を聞いてくれたと思います。また、私たちは Certificateの学生と共に CPITで行われた着物ショーにも参加する機会がありました。初めて着物の袖に腕を通す学生も多く、着付けされている最中は少々戸惑いや不安の表情を浮かべる学生もいましたが、着付けが終わった時は友達と写真を撮り合うなど、嬉しそうな様子でした。

1年生の時から日本語教師養成プログラムに興味を持っていた私にとって、このインターンシップはひとつの目標でした。研修期間中に行った2度の模擬授業を通して、授業作りの難しさや授業作りが反省と改善の繰り返しであるということも学びました。日本語を教える際に、日本語の文法知識だけではなく、その背景となる日本に対する知識も持っていることが大切だということを改めて感じ、日本語が話せれば誰でも日本語教師になれるわけではないと実感しました。大学内の実習だけでは気づかないことにも気づくことができ、この研修に参加してよかったと思います。日本語教育に興味がある人には、実際の現場で日本語教育の大変さだけではなく、やりがいを感じることでこの研修に是非チャレンジしてほしいと思います。

カルフォルニア大学留学体験記(アメリカ)

外国語学部 英語学科 豊田雄汰

カルフォルニア大学アーバイン校 留学(平成26年9月～平成27年3月)

What do English and butterflies have in common? When a caterpillar goes through metamorphosis to become a butterfly, it is very painful and difficult. I would say learning English in other countries is very similar to the process of becoming a butterfly. Studying abroad in America

changed me on three main points: confidence, knowledge, and interests.

Confidence is the first changed point of mine. Before I went to America, I had no confidence to ask questions and to complain when I should. Now, I have no fear to question and to complain. Moreover, I was afraid to speak in front of people. I did a lot of presentations when I was in America. That was helpful so that I was able to solve my speaking problems. Even though I still have stage fright, I am willing to talk in front of a group.

The second changed point is knowledge. Since my host mother Michelle is a math teacher, I had some chances to go to an American middle school to teach origami. I found several differences there. In the case of students' behavior, in Japan, students tend to just "listen" to what the teacher is saying. However, in America, the students were asking a lot of questions. Furthermore, school has unique events every day. For example, white and blue day, sweatshirts day, and pajama day. In addition, I met many people who are from different countries. I have gotten to know different ideas and cultures through talking with them. As a result, I could expand my view of the world.

Also, my interests have changed. Now, British English seems to stand out to me. I think it is because I want to know about English more to acquire language usage, so I can use English mainly for my future job. According to my interests, I could get clear clues for my future.

In conclusion, "to anyone thinking about going abroad, I highly recommend to go study abroad. I hope you, too, could go through "metamorphosis", and get some insight into your career goals for your futures.



4. 留学の動機づけや留学を促進するための取り組み

(1) 留学関係冊子の発行

留学案内誌『Study Abroad』を編集し、留学ガイダンス・個別相談時に随時配布を行い、学生へ留学の全体像を鮮明にすることができた。また、『留学ハンドブック』では、渡航準備から留学中の危機管理等の情報を総合的にまとめ、スムーズな海外生活となるようサポートすることができた。



(2) 留学ガイダンス・オリエンテーションの実施

留学ガイダンスや出発前指導を通して、留学に対する理解と動機づけを深めることができた。また、海外危機管理オリエンテーション(平成 26 年 7 月 31 日、平成 27 年 1 月 24 日)を実施し、海外での生活・学業に万全の態勢で取り組める様に指導を行った。より安全な留学を目指した支援をすることにより留学をさらに促進している。



(3) 経済的支援

学生の海外研修・留学に対し、大学独自の学納金減免制度や奨学金制度に加え、国の特別政策枠(海外留学支援制度(短期派遣)奨学金)等の適用により、継続して経済支援を行い、留学促進に繋げることができた。

奨学金制度	受給者数																																										
交換留学制度 (留学先の授業料免除)	8名																																										
留学中の学費減免制度 (杏林大学への学納金 80%免除)	平成 26 年度春学期適用: 12 名 平成 26 年度秋学期適用: 58 名																																										
杏林大学海外研修・留学奨学生 (給付額) 1年間(長期)留学・・・40万円 半年間(中期)留学・・・20万円 5～8週間海外研修・・・10万円 2～4週間海外研修・・・5万円	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>医学</th> <th>保健</th> <th>総政</th> <th>外語</th> <th>国協</th> <th>計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1年間</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>4</td> <td>-</td> <td>4</td> </tr> <tr> <td>半年間</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>1</td> <td>20</td> <td>-</td> <td>21</td> </tr> <tr> <td>5～8週間</td> <td>2</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>2～4週間</td> <td>8</td> <td>4</td> <td>-</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>19</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>10</td> <td>4</td> <td>1</td> <td>28</td> <td>3</td> <td>46</td> </tr> </tbody> </table>		医学	保健	総政	外語	国協	計	1年間	-	-	-	4	-	4	半年間	-	-	1	20	-	21	5～8週間	2	-	-	-	-	2	2～4週間	8	4	-	4	3	19	計	10	4	1	28	3	46
		医学	保健	総政	外語	国協	計																																				
	1年間	-	-	-	4	-	4																																				
	半年間	-	-	1	20	-	21																																				
	5～8週間	2	-	-	-	-	2																																				
	2～4週間	8	4	-	4	3	19																																				
計	10	4	1	28	3	46																																					
※医学=医学部、保健=保健学部、総政=総合政策学部、外語=外国語学部、国協=国際協力研究科(大学院)																																											
海外留学支援制度(短期派遣)奨学金 (独行政法人日本学生支援機構)	短期研修・研究型 30名																																										

5. サポート体制

(1) 留学のためのサポート

海外研修や留学先に渡航する前に、本学に設置してある語学学習システム(語学サロン・eラーニング等)を用い、事前学習を行った。

短期留学では引率教員が同行し、現地での生活・学業面でのサポートを行い、中長期留学では海外危機管理対策実施団体と連携し、24 時間体制で電話によるフォローが可能な体制を敷いている。また、緊急連絡網の構築も行った。

(2) 海外留学中の学生向けキャリア講座の授業配信

平成 25 年度に引き続き、授業配信システムの運用により、「キャリア指導」関係科目など学内での授業やガイダンス、セミナーの内容が海外(留学先)でも視聴でき、海外留学中の学生が帰国後の就職活動に出遅れないようサポートを行っている。

(3) ポートフォリオシステムを導入し、留学中の報告書類をウェブ上で提出できるシステムを構築した。

また、本システム内に構築されたルーブリックシステムにより、グローバル人材としての到達目標、学習達成度の測定を可能にした。

6. プログラム修了プレゼンテーション

【春学期開催】

実施日:平成 26 年 7 月 19 日(土)13 時～17 時

場 所:E401 教室

評価委員:中国外交部 梁哲明氏

杏林大学 エリック・トラウトマン特任講師

司会(英語):坂本ロビン教授 (中国語):宮首弘子准教授

発表学生:44 名(アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、中国)

(ディーキン大学1名、チチェスターカレッジ 16 名、クライストチャーチ・ポリテクニク工科大学1名、トロント大学5名、カルフォルニア大学アーバイン校6名、オックスフォード研修5名、ロサンゼルス研修8名、北京第二外国語学院1名、北京語言大学1名)



評価委員2名の先生を迎え、留学・海外研修帰国者9件、44名の学生のプレゼンテーションを行った。パワーポイントを用い、授業報告、留学経験などを留学先で学んだ言語で発表を行った。

講評では、中国外交部の梁哲明氏は英語で”Practice makes Perfect”と力強いメッセージを学生に伝えた。

【秋学期開催】

実施日:平成 27 年 1 月 10 日(土)13 時～17 時

場 所:D108 教室

評価委員:中国外交部 張智浩氏

クライストチャーチ・ポリテクニク工科大学(CPIT) Nicholas Ward 先生

司会(英語):坂本ロビン教授 (中国語):宮首弘子准教授

発表学生:38 名(イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、マレーシア、中国、台湾)

(クライストチャーチ・ポリテクニク工科大学3名/日本語教育実習4名、ビクトリア大学4名、CIE,Oxford 6名、チチェスターカレッジ3名、クイーンズランド大学2名、トロント大学1名、ニューカッスル大学8名、マレーシアインターンシップ2名、北京外国語大学1名、国立政治大学1名、河北大学1名、上海外国語大学2名)



評価委員2名の先生を迎え、留学・海外研修帰国者 14 件、38名の学生のプレゼンテーションを行った。パワーポイントを用い、授業報告、留学経験などを留学先で学んだ言語で発表した。

張智浩氏やNicholas 先生は講評では、「留学というのは言語の上達だけに留まらず、現地の文化や自然に触れることさらには友達を作ることが醍醐味である。習得した言語を用い、将来、日本と他の国を繋げていく人材に育てて欲しい」という激励のメッセージを送った。

○学生・教職員の国際力育成

1. グローバルセミナー

学生及び教職員の国際力育成を目的としたグローバルセミナーを5回開催した。

第8回グローバルセミナー 『 Bangladesh・ソーシャルビジネスを通して見えたもの～ムハマド・ユヌスの教え～』

実施日：平成26年7月15(火)

講演者：加藤桂衣氏

場 所：八王子キャンパスガーデン丘2階・国際交流プラザ

参加者：学生、教職員合計39名



平成26年度第1回目となるグローバルセミナーには、Bangladeshのノーベル平和賞受賞者で、Grameen銀行の創設者であるムハマド・ユヌス氏のもとで働いた経験をもとに、ユヌス氏の提唱する「ソーシャル・ビジネス」の普及に努めている加藤桂衣氏をお招きした。

加藤氏は日本でビジネスコンサルタントとして勤務した後、ムハマド・ユヌス氏との出会いを通じて知った、社会の問題をビジネスにする「ソーシャル・ビジネス」をより学ぶため単身Bangladeshに渡った。その後ムハマド・ユヌス氏のもとに1年2ヶ月勤務し、現在はソーシャル・ビジネスの哲学や事例を伝える講演会や勉強会の開催やBangladeshと日本との懸け橋となるコーディネーターとして活動している。更にBangladeshの子供たちの為に学校教育を提供するための「Bangladeshスクールプロジェクト」等も手掛け、活動の場を広げている。

講演で加藤氏は、ご自身の大学生時代や日本での社会人経験を振り返りながら、ユヌス氏との出会いやBangladeshでのさまざまな経験、言葉の壁、文化、宗教、価値観等の違いを学生たちに伝えた。ユヌス氏が提唱する、貧しい人々を救うための「無私の心から始まるビジネス＝ソーシャル・ビジネス」についての事例を交えながらの講演となった。

最後に加藤氏は、ユヌス氏が教えてくれた一番大切なこととして「What do you want to do?—あなたは何をしたいのか?」という言葉が学生達に問いかけた。全てのアクションの始まりは、自分が何をしたいのかを知ることから始まり、それが分かったら「Idea, Action, Finance」の順に色々な物事を始めることができる。誰もが無限の可能性をもっているというユヌス教授の思想を、講演を通して加藤氏は学生達に伝えた。

第9回グローバルセミナー 『CLIL 研修報告会(FD)』

実施日：平成26年7月16日(水)

報告者：外国語学部 高木眞佐子教授、赤嶺恵理講師

総合政策学部 岡村裕准教授、久野新准教授、荒井将志講師

場所: 八王子キャンパス E 棟 401 教室 (三鷹キャンパス本部棟3階会議室と同時中継)

参加者: 教職員合計 56 名

CLIL(Content & Language Integrated Learning)は外国語で専門科目を教える教授法の一つで、1994年に欧州で誕生し、近年、急速にグローバル化が進み、日本においてもその可能性が注目される取組である。

平成 26 年 2 月にはクイーンズランド大学(オーストラリア)で CLIL 研修が開催され、本学から外国語学部 高木眞佐子教授、赤嶺恵理講師、総合政策学部 岡村裕准教授、久野新准教授、荒井将志講師が参加した。

今回のグローバルセミナーでは、研修の概要とともに、講義の実践方法およびレジュメに関する留意点、学習効果を高めるための秘訣、外国語学部および総合政策学部における CLIL 発展の可能性などが報告された。

この報告を受け、坂本学部長は、「ラーニングピラミッド(平均的な学習記憶保持の割合)によると、「講義」が5%に対し、「(学生自身が)実際にやってみる」が75%、「他の人に教える」はそれぞれ90%に及ぶ。CLIL に適する授業、適さない授業を見極める必要はあるが、この結果を見る限り、CLIL の可能性を引き続き探ることが重要である」と見解を述べた。

第 10 回グローバルセミナー 『Teaching and Learning—自ら教育する力、自ら学び考える力—』

実施日: 平成 26 年 10 月 23 日 (木)

場 所: 八王子キャンパス D 棟 108 教室

今回のセミナーは「Teaching and Learning—自ら教育する力、自ら学び考える力—」と題し、マレーシア・マラヤ大学の上級講師であるヴィンチャラチェ・バラクリシュナン氏をお迎えした。ヴィンチャラチェ氏は中等学校で 14 年間教員を務め、現在はマラヤ大学で教鞭を執っている。また国際文化会館および国際交流基金が実施している「アジア・リーダーシップ・フェロー・プログラム」において、2014 年フェローにも選拔され、広く活躍している。



ヴィンチャラチェ氏は、ご自身の経歴を紹介するとともに、Informal educators(学校教育ではなく、家族・友人など社会における教育者)の重要性を述べた。また、学習 2 週間後に学んだことがどの程度身についているかを示す「言語の理解率(記憶率)」において、Reading が 10%に対し、Doing the real thing は 90%にのぼると説明し、セミナーにおいても、参加者自身が英語で歌ったり、その歌の内容をジェスチャーで表現したりと参加型アクティビティやペアワークが多く用いられた。

講演後のアンケートでは、「英語の聞き取りが難しかった」との感想も少しあったものの、「座学だけではなく、色々な学習方法があるのだと分かった」「記憶率のグラフを見たとき、これまで受け身で英語を勉強していたことに気付いた。効率の良い学習をしていきたい。」といったような学習方法に関する感想が多く寄せられた。また、「授業内で友達とコミュニケーションが取れて楽しかった」「英語を学ぶことは楽しいと気づくことができた」との回答もあり、参加型の授業(セミナー)に対して好意的な感想が多くを占めた。

第 11 回グローバルセミナー『同時通訳スタジオの活用方法』

実施日:平成 26 年 11 月 13 日(木)

場 所:八王子キャンパス E 棟 201 教室

本学が整備し同時通訳の理論から実践教育まで幅広く利用している同時通訳スタジオについて、語学学習における有効性を広く学内で再確認し、その更なる活用を学生および教職員が共に考えることを目指してセミナーを開催した。

はじめに、長年に渡って同時通訳スタジオを活用した語学教育を実践している外国語学部中国語学科の塚本尋教授から、日本人学生と留学生が演じる中国語劇について、語学力の向上のみに留まらず通訳者に不可欠な機敏な反応や集中力といったスキルが培われることや、仲間同士のコミュニケーションや相互理解が促進されるといった、実績および有益性についての説明があった。

塚本教授の説明に続くゼミ生による演劇の披露では、日本人学生は中国語で、留学生は日本語でといったように各自が学ぶ外国語で役を演じ、そのセリフにあわせて、日本語・中国語・英語の同時通訳が付けられた。

セミナー後に回収されたアンケートでは、語学力向上の度合いに対する驚きや感嘆のコメントが多くあったほか、学生と教員の双方から同時通訳スタジオを語学学習・教育に利用したいとの意見が寄せられた。

現在は本学中国語を専攻する学部3・4年生や通訳・翻訳研究を専門とする大学院生を中心に利用されている同時通訳スタジオだが、今回のセミナーをひとつの契機として、今後専攻言語等にとらわれない活用が広がることが期待される。



第 12 回グローバルセミナー『変貌するアジアにおける日本の役割』

日時:平成 27 年 1 月 9 日(金)

講師:スヴェンドリニ・角地氏

場所:八王子キャンパス D 棟 303 教室

参加者:学生、教職員合計 32 名

今回のセミナーは「The role of Japan in changing Asia—変貌するアジアにおける日本の役割—」と題し、Inter Press Service や University World News の特派員として活躍されているスリランカ出身のジャーナリスト、スヴェンドリニ・角地氏を講師としてお迎えした。

角地氏は、講演の冒頭、約 70 億人の世界人口うち、そのおよそ6割にあたる約 40 億の人口があり、且つ、豊かさと貧困が混在するといった広大で多様性に富んだ地域がアジアであるということをまずは認識すべきと述べた。

今なぜ、アジアで日本の存在感が低下しているのかを分析すると、「日本の首相は外国訪問で関係強化に向けた力強いスピーチするが、帰国するとすぐに辞任する」と揶揄される政治的な不安定、ODA



(政府開発援助)および FDI(外国直接投資)の減少、海外援助を拡大する中国の台頭がこの停滞の主な要因である一方、同時にアジアに起きている重要な変化、例えば、アジアで拡大する中間所得層に狙いを絞ることによって市場を席卷する韓国製品に象徴される韓国の影響、中国に迫る人口を有するインドの台頭、ナショナリズムや政治と結びつくイスラーム教原理主義や仏教原理主義があることを紹介した。

そして、少子高齢化が進む日本がアジアとの 21 世紀における関係で求められる役割やそれに向けた方策として、技術移転、インドとの関係強化、各分野におけるパートナーシップ拡大、融和的な外交政策と軍事政策、国内の労働・製品市場の開放、米国との安定した協力関係、中国との友好的な関係の発展があると語ったほか、日本の若者にはアジアに視野を広げてほしいと述べた。

角地氏は講演終了後も参加者と積極的に意見を交わし、参加学生からは、日本が今後アジアや世界と関わっていく上で大切なことが分かったなどの感想が寄せられた。

2. 国際交流の集い

国際交流の集いは、学内の国際交流促進を目的に、外国人留学生と日本人学生、教職員が授業以外の場で一堂に会し、交流を深める機会を持ってもらおうと国際交流センターが毎年2回開催している。

○実施日:平成 26 年 6 月 25 日(水)

この日の国際交流の集いには、留学生 31 名を含めた学生 87 名、教職員 31 名の総勢 118 名が参加し、司会 3 名(海上崇さん(英語)、于桜梓さん(日本語)、小林千穂さん(中国語))の3ヶ国語で進められた。



開会にあたり、松田剛明副理事長と跡見裕学長から挨拶があり、その後、留学経験者として、英語学科3年 海上崇さんと中国語学科3年 佐々木正義さんから夫々学んできた言語で挨拶があった。カリフォルニア大学アーバイン校に留学した海上さんは「アメリカは日本と違い、コミュニケーションにとっても積極的でカルチャーショックを受けた。私はここでコミュニケーション力を身に付けなければと強く思った」と話した。続いて、北京第二外国語学院に留学した佐々木さんも自身の留学経験を中国語で語り、それを留学生の王 婷婷さんが日本語で通訳する形で進行された。「留学すると中国人だけではなく、多くの国の人と交流することができる。こういう機会はめったにならないので、興味があればぜひ北京に留学してほしい」と述べた。

交流会では、学生による様々な催しも行われた。吹奏楽部による「It's a Small World」「Let It Go」など人気曲の演奏、マジック研究会によるフォーク曲げやトランプマジックの披露などがあり、会場は大きな盛り上がりを見せた。終盤には、留学生と日本人学生が打ち解けて会話をしている姿が多く見られ、実りある交流の集いとなった。

○実施日：平成26年11月5日(水)

春の国際交流の集いに続き、今年2回目の開催となったこの会は、留学生26名を含む学生89名、教職員42名の総勢131名が参加した。今回は、英語学科3年の内山苑子さんと中国語学科4年の孔陽丹さんの司会により、日本語・英語・中国語の3ヶ国語で進められた。

開会にあたり、松田剛明副理事長と跡見裕学長から挨拶があったあと、ポール スノードン副学長からは「母国語以外で乾杯と言いましょ！」との言葉があり、会場には様々な国の言葉での「乾杯！」が響き渡り、歓談の時間となった。

その後、中国語学科3年 新井秋桜さんと英語学科3年 海上崇さんが、留学についての発表をおこなった。中国に留学していた新井さんは中国語、アメリカに留学していた海上さんは英語でのスピーチとなり、新井さんのスピーチでは、中国語学科の賈曉彤さんが通訳として参加した。

昨年9月から今年の1月まで北京語言大学に留学した新井さんは「最初はほとんどの中国語が聞き取れなかった」とし、「基本的な手続きさえも大変だったとき、北京語言大学のある学生に助けられた」と話し、そして「今その人はここに居ます！」と、今年の4月から編入生として本学で学んでいる于桜梓さんを紹介すると、会場からは大きな拍手が起こった。

カリフォルニア大学アーバイン校に留学した海上さんは、アメリカでの経験を Foods、Friends、Activities の3つの視点から紹介し、現地での生活を生き活きと報告し、この留学により自分の考えが変わり、視野が広がったと述べた。

留学報告の後は、吹奏楽団が「見上げてごらん夜の星を」など4曲を演奏し、この会のために来て頂いた合唱隊と一緒に、参加者も斉唱した。その後の岩本ゼミによる出し物では、テーブルごとのチームに分かれ、○×ゲームをおこなった。最後には、毎年恒例となったマジック研究会によるパフォーマンスがおこなわれ、塚本国際交流センター長の挨拶をもって閉会となった。



3. 中国語・英語サロン合同クリスマス会

実施日：平成26年12月17日(水)

八王子キャンパスの国際交流プラザで、中国語・英語サロン合同のクリスマス会が開催され、留学生14名を含む学生46名、教職員11名の総勢57名が参加した。この会は各国のクリスマス文化や伝統を紹介し合いながら、学部学科・国籍を越えて交流をすることを目的に、中国語サロンのチューター学生とグローバル特任講師の エリック・トラウトマン先生を中心に企画された。

まずトラウトマン先生から北米におけるクリスマスの伝統について



の話があり、次に中国語学科4年生で中国語サロンのチューターでもある呉望舒さんが、中国におけるクリスマスの文化・慣習を紹介した。その後、参加者はクリスマスに係る単語ゲームや切り絵に挑戦したり、「ジングルベル」を日・中・英3カ国語で歌ったりと大いに盛り上がった。

この会の開催にあたり、チューター学生はもちろん、中国語学科の学生や英語サロン参加学生が自発的に準備に参加し、活発に学生間で交流する姿が見られた。平成 24 年度に本事業に採択され、日常的に外国語に触れられる場として導入された中国語・英語サロンだったが、今後も語学力だけでなく多文化に触れ理解を深める場としても、更に活用していきたい。

4. ニュージーランド大使館訪問

実施日：平成27年2月13日（金）

第3回大使館訪問ツアーが実施され、本学学生12名及び教職員が駐日ニュージーランド大使館を訪問した。同大使館では、フィオナ・ハイク教育担当官からニュージーランドの概要をはじめ留学先としての同国の魅力、留学生の動向、観光に関するマーケティング調査の分析、平成23年のクライストチャーチ地震による被害及びその対応など、ニュージーランドに関する幅広い分野について映像資料等を用いた説明を受けた。また、事前に学生から寄せられた多岐にわたる質問の多くに対して丁寧な回答や解説を頂き、同国に関する地域理解や異文化理解を深めることができた。



さらに、日本人現地職員としてニュージーランド大使館に勤務されているクミコ・ロイド政策アドバイザーによる業務説明や同氏のキャリアについてお話を伺った。外国大使館に勤務するためには、単に語学ができるだけでは不十分で、政治・経済・経営・法律の分野に専門知識があり、且つ、国際関係にも深い理解が必要であるため、まずは社会人として多くの経験を積む必要があるとの説明があった。また、大使館での業務(各メディアからの日々の情報収集・外交官へのレポート・特定テーマに関するリサーチ・外交通商交渉における提案や助言など)を通じて、日本とニュージーランドの橋渡しが叶うことにやり甲斐を感じているとの話もあった。本学学生に対しては、限られた学生としての時間を有効に活用して語学に限ることなく多くのことを学び取り、是非、日本政府の外交官を目指して欲しいとの激励の言葉を頂いた。

今回の大使館訪問ツアーでは、事前学習を踏まえたうえで大使館職員からレクチャーを受けたことにより、参加学生のニュージーランドに対する地域理解や異文化理解がより深まり、それによって更なる留学の促進が図られることが期待される。また、外交及び通商交渉に関わる実務者の業務や経歴に触れることで、グローバルな視野に立ったキャリア形成意識の啓発にも繋がる有意義な大使館訪問ツアーとなった。

5. 海外教員との教育交流

招聘教員:北京外国語大学 教授 邵建国氏

実施期間:平成26年6月1日(日)~6月7日(土)

協定校である北京外国語大学から邵建国教授をお迎えし、学生の語学力向上と中国理解の促進を目的にご講義いただいた。

講義では、国交回復以来の日中関係の発展、現在の日中関係と今後の展望などについて中国側の視点からお話いただき、学生たちが日中関係を考えるきっかけとなった。また、1年生を対象に北京外国語大学の留学受入れ制度について詳しくお話いただいたことは、入学後の早い段階から留学について考える機会となり、留学意欲の向上につながった。

また、6月5日(木)には、本学の松田博青理事長と跡見裕学長を訪問し、双方の教育現場の実態についての率直な意見交換が行われた。



招聘教員:クライストチャーチ・ポリテクニク工科大学 英語教員 Nicholas Ward氏

実施期間:平成27年1月6日(火)~1月16日(金)

学生の英語力向上とニュージーランドへの理解を深めることを目的とし、本学の協定校であるクライストチャーチ・ポリテクニク工科大学(以下CPIT)からEnglish Centreの英語教員であるNicholas Ward先生を招聘した。Ward氏は過去にJETプログラムで数年間日本での滞在経験があり、現在はCPITで数多くの日本人学生を指導している。



今回の滞在では英語学科インテンシブコースおよび観光交流文化学科1年生のジョイントクラスでの講義や、1月より新たに導入されたライティングセンターで指導にあたった。授業では、ニュージーランドに関する都市・人口・文化等を説明し、更には自身の出身校でもあるCPITについて写真を交えながら紹介した。ニュージーランドへの留学を検討している学生もおり、CPITでの受入れ制度について、直接話を伺える貴重な機会となった。

また、本学で年に2回開催されている留学・研修・インターンシップ帰国者報告会には評価委員として参加し、留学から帰国したばかりの学生への質疑や評価を行った。

6. 海外大学との交流

(1) テキサスA&M大学から学生が来訪

実施日：平成26年5月29日（木）

TAMU in TOKYOプログラムに参加し、日本語や日本の伝統文化・芸術について学んでいるテキサスA&M(TAMU)の学生14名と引率の教員2名が八王子キャンパスを訪問した。

予定より少し早く本学に到着した一行は、まず飛び入りで倉林秀男准教授が担当する1年生の英語クラスに参加、短時間ですぐに打ち解けた様子で、休み時間に入っても会話を楽しんでいた。その後、ポール・スノードン副学長、坂本ロビン外国語学部学部長、倉林秀男准教授と懇談し、学生たちは時折メモを取りながら熱心に耳を傾けていた。テキサスA&M大学の学生も一人ずつ、日本語でユーモアあふれる自己紹介を行い、終始和やかな懇談となった。

懇談後、国際交流プラザで杏林の学生たちと一緒に食事をした後、英語サロンに参加、グループに分かれて杏林ツアーを行うなど充実した時間を過ごした。さらに4限目には、「日本語教授法演習」の授業に参加、最初はお互い緊張している様子だったが、最後に行ったカルタ取りゲームでは白熱した戦いが行われ、終始笑顔の絶えない日本語クラスとなった。

今回の杏林大学訪問は、双方の学生にとって、学んでいる日本語・英語を実際に使う機会となっただけでなく、お互いの文化に触れる貴重な1日となった。



(2) 米マイアミ大学から学生10名が訪日、外国語学部生と交流

実施日：平成26年6月12日（木）～6月15日（日）

日本文化の体験を目的とした研修の一部として、アメリカ合衆国オハイオ州にあるマイアミ大学から10名の学生が杏林大学を訪問した。

12日には坂本ロビン学部長による日本とアメリカの違いをテーマにした話を聞き、その後外国語学部の授業や英語サロンに参加した。翌13日から15日は都内見学が中心となり、いずれの日も外国語学部のボランティア学生が案内をした。13日には三鷹の森ジブリ美術館、14日にはグループに分かれて高尾山や秋葉原を訪れた。15日には、学生支援課が主催する歌舞伎鑑賞会に同行した。本学の学生にとっては、普段当たり前と思っていた電車やバスの乗り方やレストランでの注文の仕方などが、外国人にとっては普通でないということに気付かされただけでなく、そのような違いを英語で説明しながら案内することの難しさを改めて感じる機会となった。

短い期間ではあったが、本学の学生にとっては非常に勉強になっただけでなく、更に英語力を伸ばそうという強い動機付けとなった。今回の受け入れをきっかけに、マイアミ大学とは更に深い関係を構築していくとともに、今後、他の大学とも同じような交流が出来ないか模索していきたい。



○大学のグローバル化、教育の質保証の推進体制の確立

1. GPA 制度

教育の質保証・成績評価の厳格化およびグローバル化のため、平成 25 年度から GPA を全学的に導入したことにより、「単位互換の質保証」、「学修指導(アカデミックアドバイス)への活用」「交換留学相互受け入れ基準の明確化」がより一層実現された。

2. 規程類の英語化

大学のグローバル化の一環として、杏林学園外国出張旅費規程、杏林学園旅費規程及び杏林大学教育職員学会等出張旅費規程の英語版を作成し、外国人教員のための環境整備を行った。

3. 教員のグローバル化、全学FD

平成 25 年度に引き続き、オーストラリア クイーンズランド大学の CLIL (Content and Language Integrated Learning: 専門科目・言語統合型学習) プログラムに教員 3 名を派遣した。CLIL プログラムは、教養・専門科目を英語で運営する教授法について訓練を受ける機会である。グローバル人材育成に資するより一層の授業改善を行う上で、重要な FD 活動の一つとなった。

また、「米国大学留学生獲得・選考・エンロールマネジメント(EM)の先進事例研修」に参加した。ニューヨーク州立大学バッファロー校、フォードム大学、ニューヨーク大学を訪問し、各米国大学でこれまでに培ってきたリクルーティング、アドミッション、エンロールマネジメントの戦略や手法、スキルを見聞することができた。この研修で得られたことは、今後の大学のグローバル化の推進に大いに役立つものであった。

学内においては、平成 26 年 6 月に北京外国語大学の邵建国教授を招聘し、中国語学科所属教員と教授法等についての意見交換を行った。平成 27 年 1 月には Christchurch Polytechnic Institute of Technology (CPIT) の Nicholas Ward 氏を招聘し、教員との教育交流(FDを含む)を行った。また、語学サロンを教員にも開放することで、語学力の向上を図った。

4. 事務職員のグローバル化(TOEIC受験など)

教員のグローバル教育力向上と共に、職員においても語学サロンの受講や eラーニングの利用を積極的に推進するとともに、NAFSA 年次大会に職員を派遣し、世界各地の大学関係者と情報交換をすることなどにより、グローバル化への意識の向上を推進した。また、平成 25 年度に引き続き事務職員を対象に TOEIC IP 試験を実施し、職員全体の英語力の底上げを図る取組を行った。

5.グローバルシンポジウムの開催

第4回グローバルシンポジウム「高大連携によるグローバル人材育成」

日 時:平成 26 年 9 月 6 日(土) 14:00～17:00

場 所:杏林大学三鷹キャンパス大学院講堂

参加者:138 名

第一部

I. 聖徳学園中学・高等学校におけるグローバル教育への取組み

国際交流センター長 山名 和樹 氏

II. 順天中学校・高等学校におけるグローバル教育への取組み

国際部長 中原 晴彦 氏

第二部

杏林大学におけるグローバル人材育成

外国語学部長 坂本 ロビン

第三部

パネルディスカッション

テーマ「高大連携・接続によるグローバル人材育成の可能性」

コーディネーター: 杏林大学 副学長 ポール スノードン

パネリスト

・聖徳学園中学・高等学校 学校長 伊藤正徳 氏

・順天中学校・高等学校 国際部長 中原晴彦 氏

・杏林大学 外国語学部長 坂本ロビン

開会の挨拶では本学跡見学長より、この度文部科学省「大学教育再生加速プログラム テーマⅢ 高大接続」において、本学の「日英中トライリンガル育成のための高大接続」が採択された旨報告された。これは外国語学部を中心として展開している グローバル人材育成支援の取組みを高等学校へ積極的に開放し、大学と高等学校が連携・接続することにより、グローバル人材になる志を持った若者の育成を更に促進していく事業であると説明した。また跡見学長は、昨年同じく採択された「地(知)の拠点整備事業」についても言及し、この3つの事業を柱として、本学の有する資源を有機的に活用し、地域に貢献していく所存であると述べた。

第1部では、高等学校におけるグローバル教育について、聖徳学園中学・高等学校 山名和樹 国際交流センター長および順天中学校・高等学校 中原晴彦 国際部長から、各高等学校の取組みが紹介された。

第2部では、坂本ロビン外国語学部長が、本学におけるグローバル人材育成について講演を行った。坂本学部長は、本学が積極的に導入しているアクティブ・ラーニング方式に倣い、演台から降りて来場者とやりとりをしながら説明を進めていった。

休憩をはさみ第3部は、「高大連携・接続によるグローバル人材育成の可能性」と題しパネルディスカッションが行われた。パネリストとして登壇された 聖徳学園中学・高等学校 伊藤正徳 学校長は、高等学校におけるグローバル教育の問題点として、日本の入試システムの壁(特に理系に進む生徒については、必ずしもグローバル教育が入試で評価されるわけではない)や、グローバル教育に対応できる教員の不足が挙げられるとし、その点では高大連携に大きな期待をしていると述べた。

第1部に引き続き、パネルディスカッションに登壇した順天中学校・高等学校 中原国際部長は、会場からの「グローバル教育に背を向けている生徒に対し、やる気を持たせる仕掛けや工夫をしているか。また、それでもグローバル教育を拒否した場合はどのように対応するのか」との質問に、「グローバル社会というのはダイバーシティ(多様性)の社会であり、色々な考えを認めるのもグローバル社会である。日本では、皆と同じでなくてはいけないという考え方が強く、一斉圧力のように“グローバルにならなくてはならない”と追い立てられる。これでは拒否する生徒が出てくるのも当然である。自主性を尊重し、“好きなことをやりなさい”と後押しをすることが結局はグローバルな社会に繋がる」と述べた。

最後に、坂本学部長は、日本はこれまで自国の文化を大切にしながら、様々な文化を取り入れ、それを基に独自の文化を創り出してきた。今後日本がどのようにグローバル化していくのか大変楽しみであると述べ、閉会となった。

参加者からは「グローバル人材を育成しようと試行錯誤している先生方の考えを聞ける貴重な機会となった」「大学だけでなく高等学校においても高度なグローバル教育を実施されていることに感銘を受けた」「“グローバル”の定義について考える良い機会になった」との声も多く、本事業のみならず、これから更に拡大していく高大連携事業においても大きな意義を持つシンポジウムとなった。



▲山名和樹氏



▲坂本ロビン学部長



▲パネルディスカッションの様子

第5回グローバルシンポジウム「世界への架け橋となるグローバル人材の育成」

日 時:平成 27 年 3 月 14 日(土) 14:00~17:00

場 所:大手町サンスカイルーム(朝日生命大手町ビル 27 階)

参加者:116 名

第1部 特別講演 進行:杏林大学 副学長 ポール・スノードン

(1) 中国大使館 公使参事官 白 剛 氏

(2) オーストラリア大使館 マーケティング事務所商務官(教育)

George Manetakis 氏

第2部 パネルディスカッション 進行:杏林大学外国語学部長 坂本ロビン

① 三菱電機株式会社 通信システム事業部通信システム海外営業部企画課

担当部長 青木 利夫 氏

② 北京外国語大学 教務総長 英語学院教授 金 利民 氏

③ 杏林大学外国語学部 准教授 嵐 洋子

④ 杏林大学外国語学部 准教授 張 弘(宮首 弘子)

開会の挨拶では跡見学長より、グローバル人材育成推進事業の採択から語学力強化の環境整備や 50 校を超える海外協定校の拡充等、これまでの本学の取組みについて説明があり、これらの活動が留学促進に繋がっていること、また、他学部へも波及していることを紹介した。続けて、2016 年 4 月の井の頭キャンパス開設に向けて、本学の更なるグローバル化および社会的機能の強化に向けて本シンポジウム開催は大変意義あるものであると述べた。

第1部では、中国大使館公使参事官の白剛氏とオーストラリア大使館マーケティング事務所商務官 ジョージ・マネタキス氏が講演をおこなった。

白氏は講演のはじめに、「杏林という美しい名前は中国の故事に由来しており、そのことから深い親しみを感じている」とし、「日中通訳翻訳プログラムをはじめとするグローバル人材育成に尽力している貴学の取組みを高く評価する」とも述べた。本シンポジウムのテーマであるグローバル化・グローバル人材については、「グローバル化はどこかの国が決めた単一の基準ではなく、皆でともに努力し、平和的に発展、協力していくことである。中国と日本が掲げるグローバル人材像は多くの共通認識があり、互いに協力できる部分が多くある」と述べた。

続く講演ではマネタキス氏が、「日本では急速にグローバル化が進み、日本企業の海外進出だけでなく、外資系多国籍企業の日本進出も加速する中、グローバル人材の育成が必須となっている」とし、「今企業が必要としているのは、常に流動的で馴染みのない場所においても、柔軟性・順応性がある人物」と述べた。そして「多くの企業人と話す中で感じたことは、日本で言われている“グローバル人材”は、いわゆる



▲本学学生による同時通訳の様子

“人材”で、チャレンジ精神やディベート能力があり、発想の転換ができ、世界の人たちと渡り合える人。つまり、そこで一番求められるのは、一般的にグローバル人材の素養として第一にあげられる外国語能力ではなく、考え方そのものの変革ではないか」との見解を述べた。

第2部は、三菱電機株式会社通信システム海外営業部の青木利夫氏、中国北京外国語大学教務総長金利民氏、本学外国語学部 嵐洋子准教授、張弘准教授が登壇し、夫々の基調発表のあと、本学外国語学部 坂本ロビン学部長の進行のもとパネルディスカッションが行われた。



▲パネルディスカッションの様子

会場からの「国際言語としての日本語」についての質問では、日本語教育を専門とする嵐准教授がオリンピックに向けての可能性に言及した。また、今後グローバル化していく企業において、外国人を雇用する際の日本語教育も重要であると述べた。「内向き志向と言われる若者に対し、どのように留学を勧めていくか」との質問には、張准教授が「日本人の“空気を読む”という習性を利用する。空気を読む日本人だからこそ、周囲の留学にむけた雰囲気づくりが重要だ」と答え、会場を沸かせた。今回の登壇者のなかで唯一の企業人である青木氏には、同じく企業人である参加者から「英語や日本語等の言語を“道具”として使っているが、言語運用とは異なる部分で心がけていることはあるか」との質問があり、「商品や伝えたいことのコアな部分は、言語を運用すれば伝わる。まずはその内容を日本語で万全に説明できる準備をしておくことが重要」と述べた。パネルディスカッションの終盤には、金氏が「日本人への日本語教育が見直されているように、中国でも中国人に中国語を教えることが大切になっている。今の学生は文体の理解が乏しい。日常とは異なるシチュエーションで、異なる表現、高度で雅やかな言語を話せるようになることが重要」との見解を示した。

プログラム最後となる総括では、本学学生が同時通訳を務め、塚本国際交流センター長による講演者及びパネリストへのお礼の言葉をもって閉会となった。通訳を務めた学生は緊張の面持ちでしたが、日頃の同時通訳の学習成果を存分に発揮した。



▲白剛氏



▲ジョージ・マネタキス氏



▲塚本国際交流センター長

○対外広報の展開

1. 大学 HP にグローバル事業特設サイトを構築

本事業に係る概要や実績・進捗状況等を、国内外の大学、社会や高校生等を対象に広く発信することにより、本事業の今後の展開及び学生の海外留学の促進に資するため、ウェブサイトの再構築を行った。併せて海外に発信するための英語版ホームページの作成や、学生への情報伝達に配慮したスマートフォン版ホームページの構築等も積極的に進め、タイムリーに情報を発信しながら留学経験者・希望者の交流ネットワーク構築を目指し、より一層の情報発信体制が整備された。



特設サイト：<http://www.kyorin-u.ac.jp/univ/feature/global/>

2. 学内サイトの立ち上げ

昨年度から引き続き、学内サイト「あんず Net」において、国際交流課のサイトを運用し、本学教職員にむけて事業の進捗状況を随時発信した。海外出張報告書、本学国際交流委員会および本事業推進委員会の議事録等を随時アップロードし、情報共有のツールとして活用されている。

3. プレスリリース・サービスの利用

本事業に係る概要や実績やイベントの開催案内等を、国内外の大学関係者、マスコミ関係者および一般ユーザーの方々を含め、1,725 の機関に配信することにより、本事業の今後の展開及び学生の海外留学の促進の取り組みを発信した。

4. 本事業紹介パンフレットの作成

産業界、受験生（保護者を含む）、高等学校教員に向けて、事業採択からこれまでの取り組み・実績を外部に広く発信するため、本事業パンフレット『Let's Go Global!』の改正版を発行した。また、英字新聞『Kyorin Times vol.2』を作成し、本学在校生および海外からの訪客に配布した。

『経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援

平成 25 年度 事業成果報告書』（日本語）

『Let's Go Global! 2014 版 』（日本語）

『Kyorin Times vol.2』（英語）



5. シンポジウムの開催告知

シンポジウム開催前には、本学の取り組みを社会に広く発信するため、大学・高校・企業等に向けてフライヤー送付による開催告知を行った。また、新聞紙上でも開催告知を行い、産業界・経済団体・自治体・高校生を含む高等学校関係者等からの参加者も得ており、グローバル人材育成における産官学の有機的連携を図るきっかけとなった。

中間評価における特記事項(留意事項、参考意見)への対応状況

1. 留意事項に対する対応

- (1)「スマートでタフな交渉能力をもつ学生」の定義については、構想調書から導かれる育成すべき「グローバル人材像」を明確化し、ルーブリックの評価項目を設定することでより厳密に再定義した。また「スマートでタフな交渉能力をもつ学生」の育成方法・実践については、ビジネス等の現場で遭遇すると予測される事態をシナリオ化し、問題発見から問題解決に至るシミュレーションを継続的に行うことで、「答えのない問題」に粘り強く的確に対応する思考のフレームワークを涵養することを目指す。また、「スマートでタフな交渉能力をもつ学生」の測定方法は、グローバルルーブリックにより測定・可視化を図る。また、ルーブリックの測定結果を分析し、人材育成方法の改善をさらに進めていく。
- (2)卒業時の外国語力スタンダードを満たす学生数については、中間評価(平成 25 年度卒業生の達成数)では目標値を下回っていたが、平成 26 年度卒業生での達成数は目標値を上回っている。今後さらに語学教育方法の点検・分析と改善を行い、引き続き目標値を上回っていくよう、達成のためのルートマップの作成し実践していく。

2. 参考意見に対する対応

- (1)アクティブ・ラーニング教室を利用した PBL 型のケーススタディ演習等の実施
「答えのない問題」に最善解を導く思考のフレームワークを構築し「スマートでタフな交渉能力」を涵養する教育手段として PBL 型授業は効果的である。取り扱う事例を継続的に蓄積し、加筆・修正を加えながら教員間で共有するとともに、他大学・機関に向け発信することも検討していく。
- (2)外国語学部から他学部への波及の促進
平成 28 年度のキャンパス移転(全学部の三鷹市への統合)を機に、学内全学部においてグローバル教育を推進していく方針が確認されている。具体的には外国語学部および本事業の教育資源を共有した語学教育の充実、海外留学・研修の推奨などである。
- (3)語学力向上のための施策やナンバリングの導入、GPA 評価制度の採用等については、事業実績報告書(冊子)やホームページで公表するほか、シンポジウムやセミナーで他大学等を交えて成果の共有を図っていく。
- (4)中国や韓国からの留学生は、協定校からの交換・派遣留学生を中心に、引き続き受入れの拡大を図っていく。また中国から優秀な学生を直接確保するため、複数の日本の大学と中国の高等学校の間で行う「日本大学連合学力試験」への参画も検討している。

第三者評価委員会の開催概要

日 時 平成27年 7月24日(金) 14時～16時

場 所 杏林大学三鷹キャンパス本部棟11階貴賓室

第三者評価委員(敬称略)

内田 勲(横河電機株式会社 社友)

ブルース ストロナク(テンプレ大学ジャパンキャンパス 学長)

木村 英樹(東京大学大学院人文社会系研究科 教授)

1. 中間評価結果と今後の対応について

今回の中間評価結果を重く受け止め、「次にどう繋げていくか」を考えていく必要がある。評価の全てを数字だけで評価されたわけではないはずであり、取組みの中身の分析が大事である。

目標が達成できなかった項目については、原因を分析し、長期・短期、優先順位を立てて、改善の見込みを立てる必要がある。中身がしっかりすれば、自然と結果がついてくる。そのためには、取組むべき項目をブレイクダウンし、それぞれの数値目標を設定する。各事業の担当責任者を定め、1 つ 1 つの項目を細かく追いかける仕組みを作らなければならない。更に達成成果を定期的にチェックしながらマネジメントすることが肝要である。

また、大事なことは成果ではなく計画(政策)であるとも言える。現時点での評価を更に高めていくために、どのような政策を行うべきかを考えることが重要である。この評価をもとに、「評価と成果」両方の政策を作らなくてはいけない。

事業評価において、設定した目標の達成は当然のこととし、更にプラス・アルファの事業成果が求められる。本事業の補助期間である残り 1 年半以降も継続していくことを考え、杏林大学の特色を活かした成果を築いてほしい。また更に次の補助事業にも挑戦するような気持ちで取り組んでいくことが必要である。

2. スマートでタフな交渉能力の育成及び評価方法について

ここでいう「スマートでタフ」の定義をより明確化する必要がある。「スマートでタフ」の定義として、交渉力(Negotiation)は学生にはそぐわない。特に学部生の「スマート」の定義はコミュニケーション能力やディベート力ではないか。「タフ」は confident、自信があるという解釈が正しいのではないか。また、「スマートでタフ」の定義に基づき、「相手を理解し、強く説得でき、絶対に後に引かない能力」を、どう測るかというのが重要である。

杏林大学は「スマートでタフな交渉能力」をルーブリックにより測定・評価しようとしているが、ルーブリック評価において Peer review を実施するべきである。コミュニケーションには Peer review が大切である。

なお、アメリカでは教員評価には Peer review を取り入れているが、日本にはそういう概念がないため、Peer review という意識がない。学生時代にそういう意識や考えを持つ習慣を付ける為に大切である。

3. インターンシップについて

インターンシップは最低 3 ヶ月の長期でなければ意味がない。2 週間ではインターンシップとは呼べない、せめて 1 学期である。毎週 40 時間や 3 か月間などのプログラムを単位付きで実施すべきである。

インターンシップの目的はやはり就職に繋がる体験である。一方、インターンシップは教室外での授業という位置付けとしてアカデミックな面も踏まえ、もう少しプログラムを増やしたほうがよい。

テンプル大学ではインターンシップ 140 時間と教員との話し合いの時間を合わせて 3 単位を付与している。他大学も同様のインターンシップに取り組んでいるが、大学の制度を変えないと長期間のインターンシップができない。そのためには事務的な体制の整備も必要である。SGU(スーパーグローバル大学創成支援)の採択大学でも 2 週間のインターンシップが多い。準備は大変であるが、もう少し長い期間で、中身のあるプログラムを作るべきである。

数値目標を達成しても実質的な中身がなければ評価できない。留学・インターンシップ等の主体は誰なのかを明確にし、結果としての数字だけではなく、詳しい情報を提示してほしい。なお、海外の大学病院等での臨床・クラークシップ(医学部生の病院実習)の参加者増は大変良いことである。難しいことにチャレンジしていることは評価できる。

4. 杏林大学のグローバル人材育成事業への期待

杏林が中国に強いという点は、文部科学省に大変期待されている。期待値が高いということ意識して欲しい。杏林の強みは何なのかを理解し、中国からの受入れに前向きに考えてほしい。それを活かして、どのように評価してもらえるか検討すべきである。

中国への留学生や中国からの受入留学生を増やすために奨学金をどうするのか、企業から募るのか方策を考えなければいけない。プロジェクトを作って取り組みれば、文科省も協力してくれるのではないかと。前向きに積極的に、杏林大学の中国への強みを活かしてほしい。

アメリカの大学はこれから中国のキャンパスを減らしていく傾向にある。アメリカが手を引いていく中で、日本にとっては中国とのコネクションを強化するチャンスになる。また、海外(中国)に杏林のサテライトがあると、留学生の獲得の動きがやりやすくなるのではないかと。

5. 事業成果の可視化及び他大学、社会等への成果の公表について

就職先は学生にとって最重要事項である。卒業生の就職者数からみる 1 割くらいのグローバル企業への就職率は良いと思う。更に、グローバル企業に就職した卒業生と就職先の上司のインタビューをウェブにアップすると、学生も興味を持つので良いのではないかと。

杏林大学での取り組みは控えめで、ある意味地味である。他大学では、「現地主義」などという言葉をつけてキャッチーに見せているケースもある。新しい取組みを前面に出し、上手く他大学、学生、社会に配信していく必要がある。

また、杏林大学での取り組みをケーススタディとする、他大学へのワークショップを行うなど、外に向けて配信して欲しい。実質があるので、それをアピールを行っていく必要がある。他大学と比較するのではなく、杏林大学としてどのように成果を導き出すかが大切である。

平成 27 年度事業計画

- (1) 平成 26 年度の実績報告を取り纏め、点検・改善を加え、平成 27 年度の事業展開を推進する。
- ・プログラム推進委員会(毎月開催)で、平成 26 年度の事業報告を取り纏め、自己点検する。さらに、第三者評価機関から評価・助言をいただき、平成 27 年度事業の改善・展開を推進する。
 - ・本事業を推進するためのグローバル専門職員を雇用する。(継続)
- (2) ネイティブ語学教員の雇用(継続)、語学サロン運営のための留学生チューター雇用、独自教材の改良等により外国語力の強化を図る。
- ・語学教育を強化するため、独自教材(CIC、PEP、同時通訳等)の改良・開発を進める。
 - ・中国語・英語サロン、eラーニング語学学習システムの活用を、正課授業(の評価)と連動させることを強化し、学習効果を高めていく。また海外 TV ニュース番組(中国語・英語)が常時視聴できる環境を維持する。
 - ・語学検定試験により語学教育・学習の成果を測定・分析し、語学クラス分け及び今後の語学教育の改善に資する。
- (3) アクティブ・ラーニング型の教育(PBL 形式のディベートシミュレーション、ケーススタディ演習等)を実施する。
- ・PBL(課題設定・解決型学習)や少人数クラスによるアクティブ・ラーニングの実施について、本学の第三次中期計画・教育開発部会と連動し、これまでの取組を点検・改善案策定の上、「スマートでタフな交渉能力」涵養を目指し継続的に実施していく。
- (4) 「卓抜した語学力」「スマートでタフな交渉能力」の測定・評価方法の確立・運用を開始する。
- ・語学検定試験を活用した「卓抜した語学力」測定に加え、「スマートでタフな交渉能力」の測定・評価方法(ルーブリック・ポートフォリオ)を研究・確立し、本格的な運用を開始する。
 - ・プログラム修了プレゼンテーション(留学報告会)、卒業研究報告会を開催し、外部評価委員を含めた評価を行う。
- (5) グローバル理解を深めるため、国内外の有識者を招聘してグローバルセミナーやシンポジウムを開催し、本事業の深化を図る。
- ・グローバルセミナーは、国内外の有識者や、グローバル産業界で活躍している方(卒業生を含む)を講師として招聘し、主に学生・教職員を対象に開催する。(年6回開催)
 - ・グローバルシンポジウムは、産官学の有機的連携により、国内外の有識者による講演のほか、本学教員・学生を含むパネルディスカッション等を行い、(学生のキャリアデザイン構築に資する)グローバル人材として求められる素養等について考察を行い、事業の深化を図る。
 - ・外国の在日大使館を訪問し、各国の事情(経済・産業、歴史・文化、日本との関係等)について理解を深める。

(6) 海外協定校及び留学プログラムの拡大・充実、海外インターンシップの推進を図る。

- ・中国語圏及び英語圏の大学とのさらなる協定拡大を図るとともに、留学プログラム(インターンシップを含む)の開発をさらに進める。
- ・教職員が学生の協定先・留学先の大学を訪問・滞在し、教育プログラムの確認・調整を行う。
- ・留学に関する危機管理の一環として、「留学危機管理オリエンテーション」を実施するほか『留学(危機管理)ハンドブック』の改訂版を制作・配布する。
- ・グローバルポートフォリオを活用し、学生の留学中レポートを時系列にファイリングすることで、学生が振り返りの資料として活用できるようにする。

(7) 大学のグローバル化、教育の質保証の推進体制を確立する。

- ・学内情報の多言語化や、FD や SD、海外研修(CLIL)等により教職員のグローバル化を推進するほか、職員の語学力向上を図る。
- ・海外協定校等から教員を招聘し、本学での授業を担当していただく。
- ・GPA 等による「単位認定の質保証」、また学修指導へ活用方法を推進する。
- ・シラバスに予習・復習課題を明記するほか、シラバスと連動した学習支援ポートフォリオ等を活用し、学生の学修時間確保を推進する。

(8) 本事業(留学促進、語学強化、シンポジウム等)の対外広報の展開

- ・本事業のポータルサイトをさらに充実させるとともに、定期的な情報の更新を行う。
- ・本事業による留学実績、語学強化等の進捗及び成果を広報・発信するため、ニューズレターを作成し配信する。
- ・新聞等のマスメディアによる広報・広告を実施する。
- ・NAFSA や GGJ-Expo など国際化拠点事業採択他大学との情報交換、情報発信の場を活用する。

(9) 本プログラムで育成した学生の就職の支援・促進

- ・授業配信システムにより、海外留学中の学生に、学内での授業「キャリア指導」等を配信する。
(継続)
- ・キャリアサポートセンター(就職支援部門)と連携し、本プログラムで育成した学生の就職を促進する。
- ・グローバル企業との意見交換会を実施し、本事業で学んだ学生の就職支援をより一層加速させる。

(10) 日本発信プロジェクト事業(日本文化発信・日本語学習支援)を継続・展開する。(ニュージーランド、アメリカ等)**(11) 八王子キャンパス(外国語学部等が所在)が平成 28 年に井の頭キャンパス(三鷹市)に移転することに伴い、本事業に係る施設・設備を含む機能全般が、遺漏なく移設・継続し、更に諸環境の整備を図る。**

文部科学省 スーパーグローバル大学等事業
経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援

平成 26 年度 事業成果報告書



杏林大学 国際交流センター

三鷹キャンパス 〒181-8611 東京都三鷹市新川 6-20-2

八王子キャンパス 〒192-8508 東京都八王子市宮下町 476